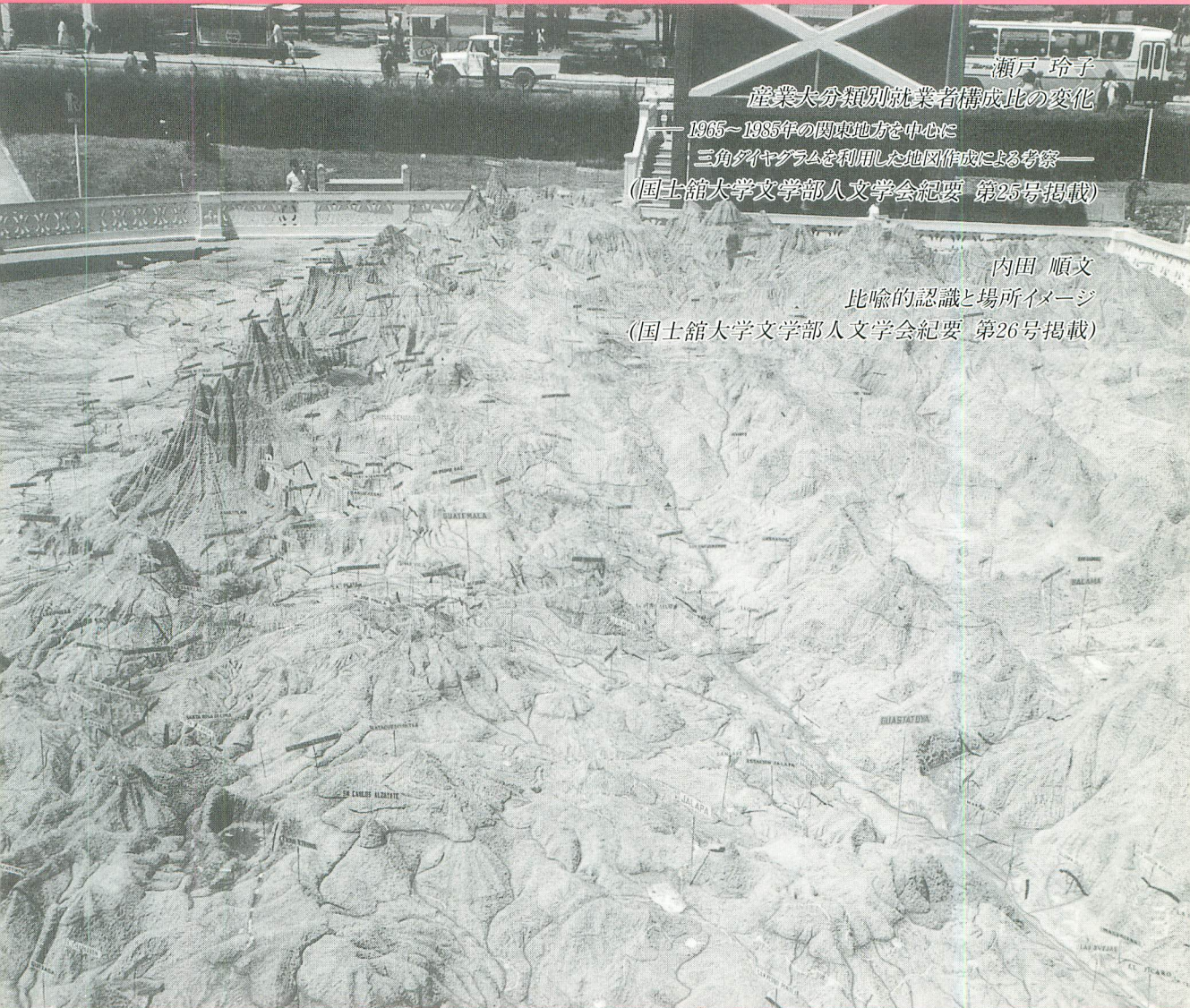


国士舘大学 地理学報告

1994年 No.3 隔年刊



瀬戸 玲子
産業大分類別就業者構成比の変化
— 1985～1985年の関東地方を中心に
三角ダイヤグラムを利用した地図作成による考察 —
(国士舘大学文学部人文学会紀要 第25号掲載)

内田 順文
比喩的認識と場所イメージ
(国士舘大学文学部人文学会紀要 第26号掲載)

グアテマラシティ立体地図公園 1991年3月 瀬戸玲子撮影

産業大分類別就業者構成比の変化

—1965～1985年の関東地方を中心に三角ダイアグラムを利用した地図作成による考察—

瀬戸 玲子

はじめに

大正9年(1920)以降の国勢調査資料を使って先ず都道府県別に産業大分類別就業者数および第1次、2次、3次産業就業者構成比の経年変化を概観した。^(注1)東京は就業人口数の多さ、昭和25年(1950)以降の就業人口の伸びの大きさと傑出しており、周辺県へ波及する勢力も大きい。そこで関東地方を取り上げ、昭和40年(1965)～60年(1985)の市区町村別の統計を使って詳しく見ることにした。1次、2次、3次の構成比は三角ダイアグラムを使うのに適しており、このカテゴリー区分にもとづいて昭和40年、50年、60年の市区町村別コロプレスマップを作成、比較して経年変化を考察することにした。

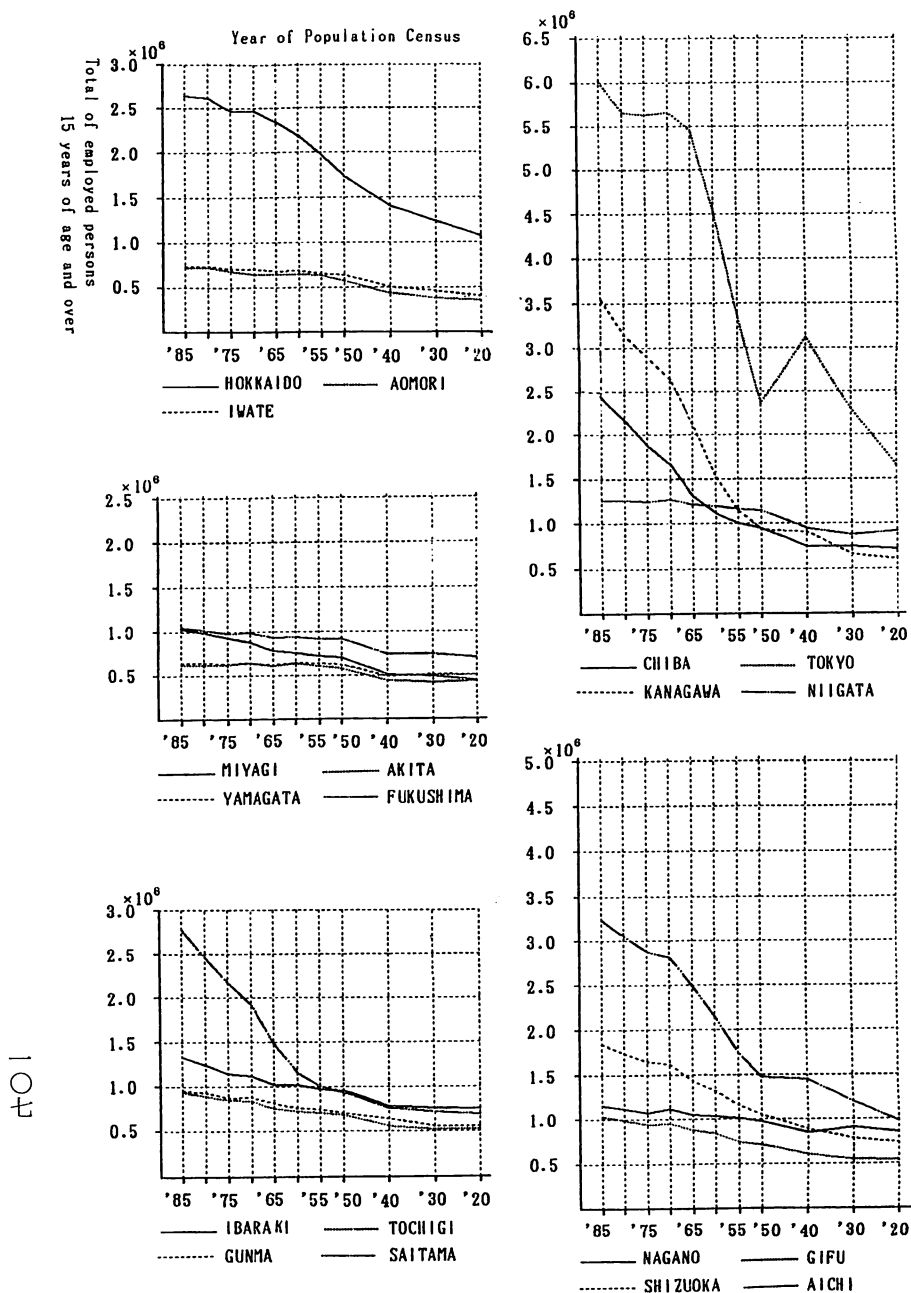
1. 都道府県別就業者総数および産業大分類別就業者構成比の大正9年(1920)～昭和60年(1985)における変化

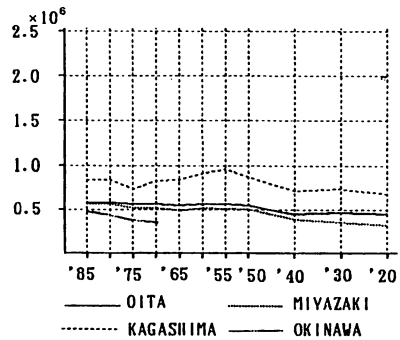
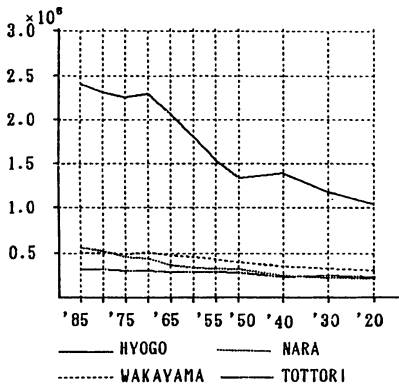
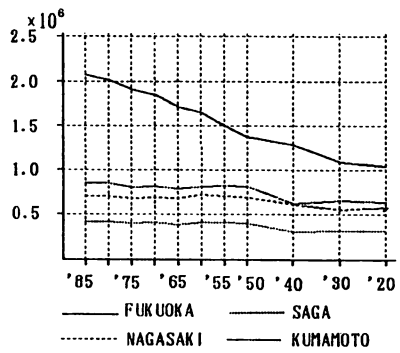
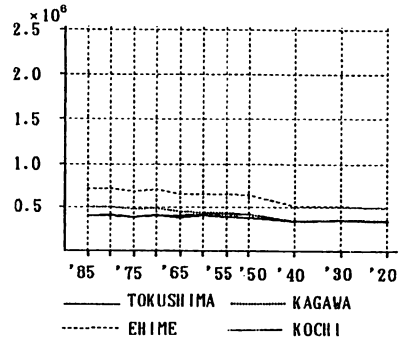
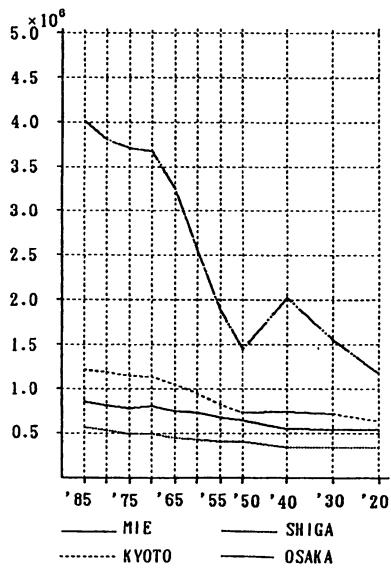
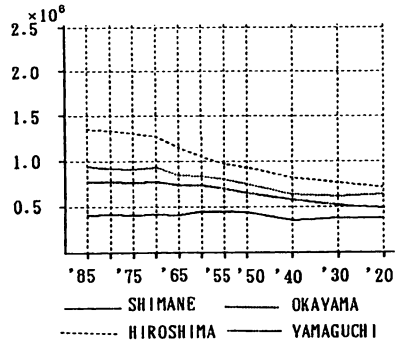
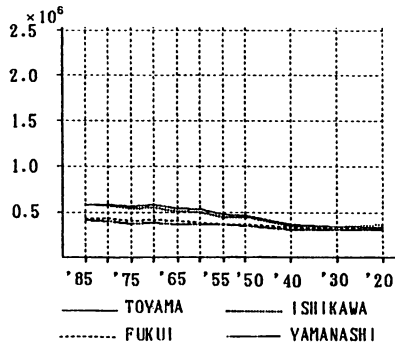
国勢調査の始まった大正9年以降の産業大分類別15歳以上就業者総数の変化を都道府県別にグラフ化した。縦軸に就業者総数、横軸に国勢調査年をとるが、三角ダイアグラムと対照しやすいよう、右端に大正9年をおいた(図1-1～12)。産業大分類別就業者構成比の変化は三角ダイアグラム⁽¹⁾⁽²⁾に示す。これは60°をなす三つの座標軸からなり、正三角形内の任意の点から各辺に下した垂線の長さの和は一定で、三角形の高さhに等しい、すなわち $X+Y+Z=h=100$ となることを利用し、三つの要因、三つのカテゴリーの組み合わせに用いられる。正三角形の底辺を第1次産業就業者の百分比の軸として、左端を0、右端を100%、辺長を10等分して左側の辺に平行に10%毎の目盛りの短線をかく。同じように反時計廻りに第2次、第3次の構成比の目盛りを付ける。都道府県毎に各国勢調査年の1次、2次、3次の%が該当する位置に点をプロットして折れ線グラフにした(図2-1～12)。100-(1次+2次)=3次なので、1次と2次の数値だけでプロット出来る。この2種のグラフから都道府県別の経年変化の特色をよむことができる。

就業人口総数の変化を示す折れ線(図1-1～12)の形をみると、大正9年の点は1次の%の値が高い右端にあって、経年的に1次の%の値が低い左の方に移って行く。この場合2次の値が横ばいないし漸増の時期と、急角度で上昇する時期がある。東京、大阪は上昇角度が最も大きい。昭和25年(1950)に両者ともぐんと下降して第2次世界大戦の影響が出ている。その後昭和40年(1965)

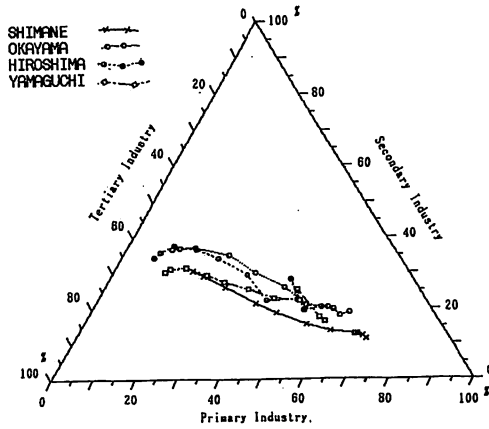
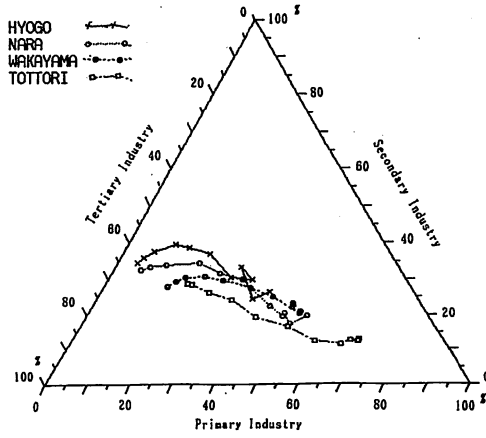
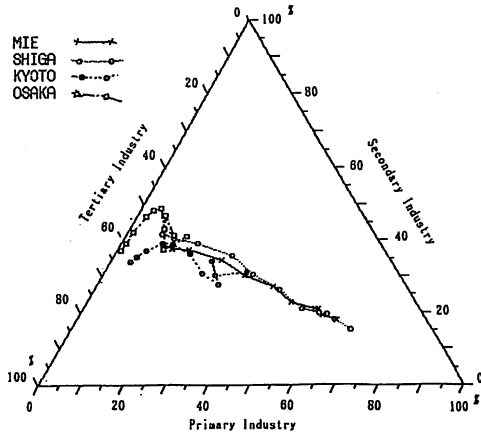
図 1-1~12 大正12年(1920)~昭和60年(1985)の就業者総数の変化

Fig. 1~12 Change of total employed persons 15 years of age and over by industry, from 1920 to 1985 in prefecture

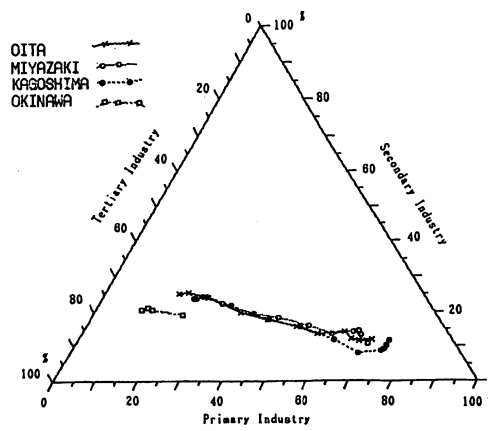
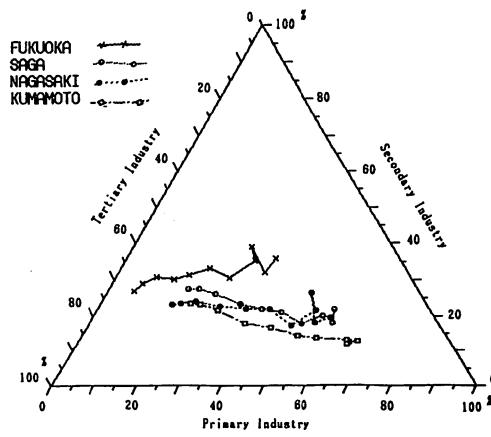
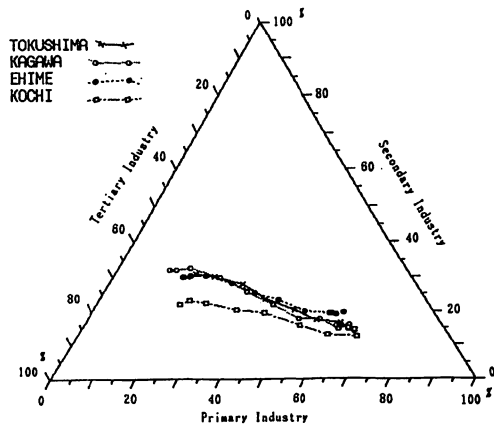




10K



1011



まで急上昇を続けたが、以後横ばいに転じた。愛知、兵庫も昭和15年（1940）～25年（1950）では横ばい、以後上昇角度が急になるが、45年（1970）から横ばいないし微増減に転ずる。北海道は大戦の影響もなく増加を続けたが、やはり昭和45年（1970）から横ばいないし微増である。福岡、静岡、広島も上昇を続けてきた。神奈川は昭和15年（1940）、埼玉、千葉は25年（1950）以降、それまでの横ばいから急上昇しており、大戦中の落ち込みもみられず、東京の就業人口増加圏に取り込まれていったことがうかがえる。

2次の値が少しずつ高くなり、左の方に緩傾斜で上がってゆくタイプは東北六県、鳥取、島根、四国4県、熊本、宮崎、鹿児島などにみられ、1次優位型の県といえる。これに対し、2次の増加がもっと急傾斜をなし、40%程度まで上がってゆくタイプを示すのは埼玉、栃木、群馬、茨城、千葉、新潟、山梨、富山、石川、福井、岐阜、静岡、長野、滋賀、三重、奈良、和歌山、広島、岡山などで、2次優位型の県である。なかに、昭和15年（1940）頃まで2次の値が高い時期があって、その後低くなった群馬、栃木、福井、山梨、岐阜、長野、山口、長崎、佐賀などは地場産業などの製造業の隆盛期があった県である。大正9年（1920）既に、1次の%の値がかなり低いところから出発し、折れ線の形が特異なのは東京、神奈川、大阪、京都、兵庫、福岡などで、3次優位の都市型の都府県である。出発点で東京は10.6%、大阪は14.5%であったし、神奈川は33.0%、京都は33.4%、福岡は35.1%であった。北海道は53.8%でこれは本州以南の農業県に比べると低い値である。2次の値は30%、40%程度まで上がってゆくが、最高でも大阪の49%止まりである。その後は3次の値が増加し、線グラフは左下に折れ曲がる。この屈折点は東京、大阪、北海道では昭和35年（1960）、神奈川、埼玉、愛知、京都、兵庫、和歌山では45年（1970）、広島、山口では50年（1975）、宮城では55年（1980）に現れている。3次の最高は昭和60年（1985）の東京で69%であるが、この方はまだ上がる可能性がある。

2. 市区町村別の産業大分類別就業者構成比

サンプル調査のため、数県について昭和40年（1965）以降の国勢調査の市区町村別統計を使って、三角ダイアグラムに1次、2次、3次産業就業人口構成比を市区町村毎に1点ずつプロットした。次ぎの5図である。1) 昭和40年の茨城県。この県は関東地方の中では大正9年（1920）、1次の値が最も高く72.2%で昭和60年（1985）までずっと1位を保ち続けている。2) 昭和45年（1970）の愛知県。この県は関東・中部地方のうち、2次の値が最も高い46.1%を示した。3) 昭和60年（1985）の茨城県。昭和35年（1960）からは急速に1次の値が減少、2次が上がって昭和60年には34.7%に達した。4) 昭和60年（1985）の茨城県のD.I.D。^(注2) 全域が実質的な市街地であるD.I.D.を別に取り上げた。5) 昭和60年（1985）の神奈川県。この県は昭和35年（1960）の東京について2次の値が45年（1970）最高の45.2%に達したのち、3次の値が急速に上昇し、

60年（1985）に60.8%になった。

完成した図をみると、昭和40年（1965）の茨城県の図3-1では、1次の値が60～85%で2次の値が20%以下のところに点が密集し、1次が40～60%で2次が30%以下のところにそれよりは疎な集団がみられ、ごく少数のみが2次または3次が極めて高いところに分散して1次優位型を示す。昭和45年（1970）の愛知県の図3-2では、1次が30%以下で2次が40～60%のところに点が密集し、1次が30～40%で2次が30～40%のところにそれよりは疎な集団がみられ、2次優位型を示す。しかし、1次が5%以下で2次、3次の値が極めて高いところにも点の集中がみられる。

図3-2では、就業人口構成比と就業人口規模との関係を見るため市区町村別の就業人口数を10,000人以下、10,000～19,999人、20,000～49,999人、50,000人以上に階級区分し、点記号の種類を変えて三角ダイアグラムにプロットした。これをみると50,000人以上の市区町村は2次、3次の値が高いところに集まっているが、1次の値が20%前後のところにもある。20,000人～49,999人の市区町村は2次の値が40～70%ところに集まっている。昭和60年（1985）の茨城県の図3-3では、40年には疎であった1次の値が40%以下で2次の値が30～50%のところに点がまとまって移っている。図3-3でも就業人口規模別に点記号の種類を変えてプロットしてみた。就業人口数50,000人以上の市町村は2次の値が50%とか3次の値が70%など高いところにみられるが、20,000～49,999人

図3-1 第1次、2次、3次産業就業者構成比 昭和40年(1965) 茨城県 市町村
Fig. 3-1 Population structure by industry

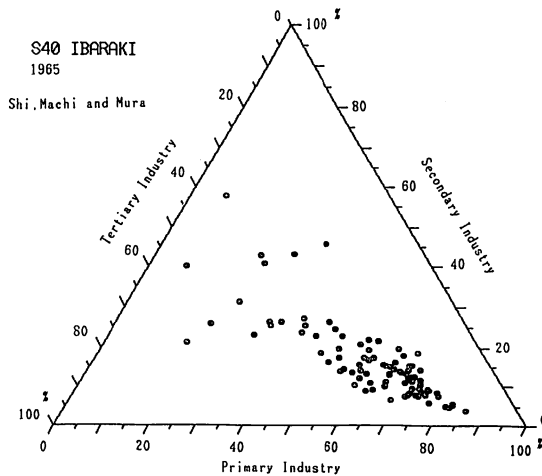


图 3-2 第 1 次, 2 次, 3 次産業就業者構成比 昭和45年(1970) 愛知県 市区町村
 Fig. 3-2 Population structure by industry

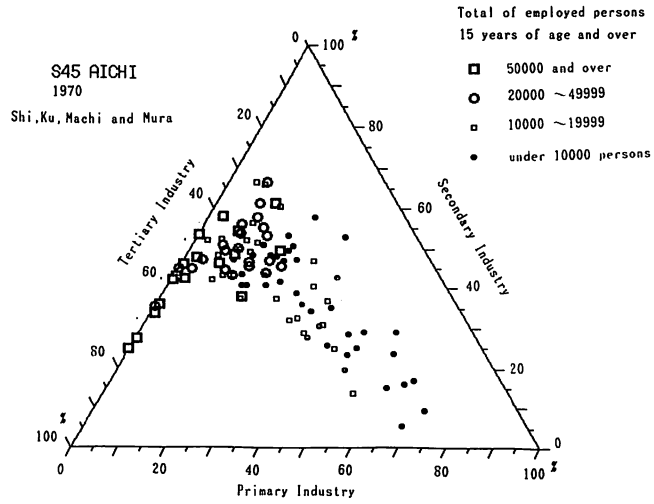
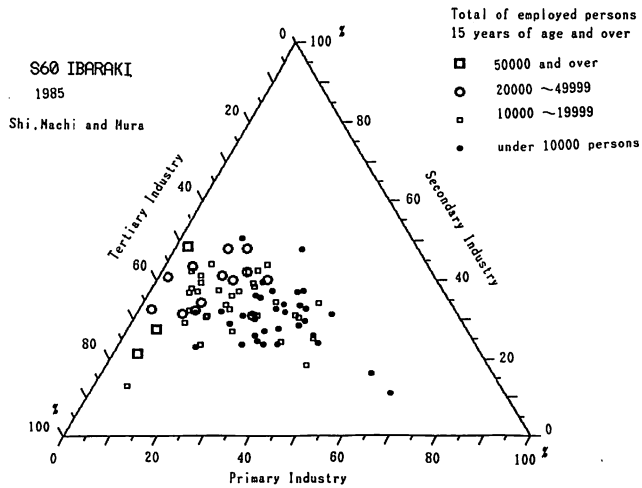


图 3-3 第 1 次, 2 次, 3 次産業就業者構成比 昭和60年(1985) 茨城県 市町村
 Fig. 3-3 Population structure by industry



九九

図 3-4 第 1 次, 2 次, 3 次産業就業者構成比 昭和60年(1985) 茨城県 D.I.D.
 Fig. 3-4 Population structure by industry

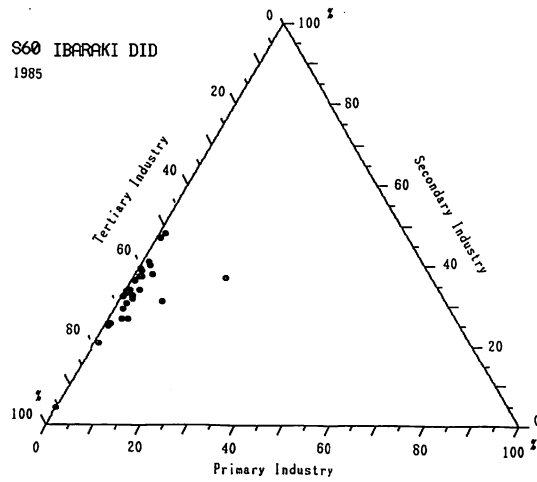
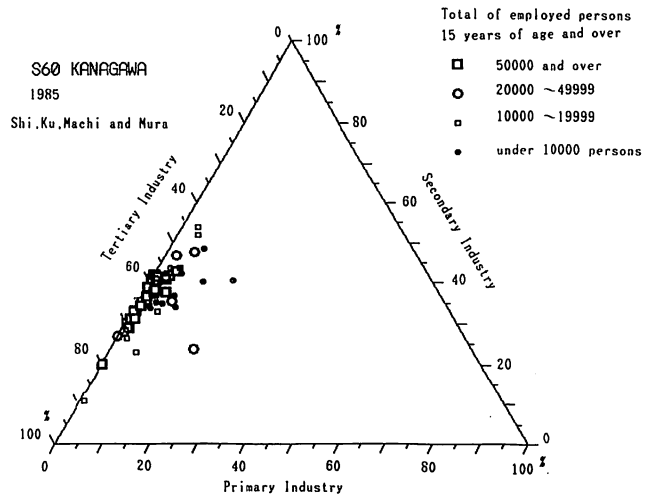


図 3-5 第 1 次, 2 次, 3 次産業就業者構成比 昭和60年(1985) 神奈川県 市区町村
 Fig. 3-5 Population structure by industry



九八

の市町村では1次の値が30%というのもあって、20,000以下の町村の点と混じり合っている。D.I.D.だけを取り上げた昭和60年(1985)の茨城県の図3-4では、1次の値が10%以下で2次の値が30~40%、3次の値が50~80%のところに点が集中している。昭和60年(1985)の神奈川県を図3-5も就業人口規模別に点記号の種類を変えてプロットしたが、点の殆どが1次の値が10%以下で2次の値が30~40%、3次の値が50~70%のところに集中していて、神奈川県全体の市区町村の点が茨城県のD.I.D.だけを取り上げた点の分布に類似していることを示している。実質的な市街地のみからなる市町は2次、3次の値が高いところに点がかかるが、就業人口数が大きくても農村部分を含む市区町村は1次の値が比較的高いこともある。

3. 産業大分類別就業人口構成比の三角ダイアグラムによる カテゴリー区分

三角ダイアグラムは、三つの百分比の該当する位置に点をプロットして性格をよみとったり、⁽³⁾線で結んで経年変化をみるほか、同質的とみなせる範囲にカテゴリー区分し、これにもとづいて行政区画別色分け地図をかくのに使われる。カテゴリー区分は正三角形の各辺に平行な線を引き三つの値の相当する範囲を囲う。産業大分類別統計では第1次、2次、3次産業に分けているので三角ダイアグラ

図4-1 「日本国勢地図帳」の「産業別人口構成」におけるカテゴリー区分
Fig. 4-1 Population structure by industry. 'The national atlas of Japan'
Geographical Survey Institute (1977, 1984, and 1990)

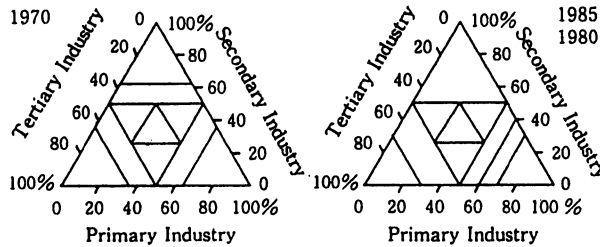
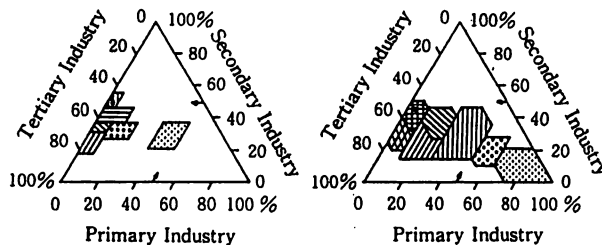


図4-2 「DIRCKE 世界アトラス」の「職業構成」におけるカテゴリー区分
Fig. 4-2 Erwerbsstruktur. 'DIRCKE Weltatlas' Westermann (1988)



ムがよく使われる。国土地理院の日本国勢図帳の⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾国勢調査資料を使った「産業別人口構成」図の区分では、図4-1のように各辺に平行な線を引いている。ドイツのDIRCKE世界アトラスの「職業構成」の凡例では図4-2のように、各辺に平行な線で切っているが、正三角形内全域でなく、統計値が出現する範囲に限って区分してある。

今回のカテゴリー区分にあたっては、就業人口構成比の変化をみるという目的から次ぎのような方法をとった。1) 第1次産業就業者構成比の経年的減少が明瞭なので、まず1次の値が60%、40%、20%、10%の線で区切る。2) 1次の値の減少分は2次と3次に分かれるので、1次の値の100%にあたる三角形の頂点から対辺を2等分する垂線を引き、これを中心線とする。3) 中心線に平行に±5%の線を引く。これは2次と3次の構成比の差が10%以内か以上かを分ける線となる。ただし、1次の値が40%以上となる領域についてはこの平行線は引かず、一まとめにする。このようにして11にカテゴリー区分し、記号で示したのが図4-3である。すなわち、A：1次が60%以上、B：1次が40~60%、C1：1次が20~40%で、2次と3次の差が10%以内、C2：1次が20%~40%で2次の方が3次より10%以上多い。C3：同じく、3次の方が10%以上多い。D1：1次が10~20%で2次と3次の差が10%以内。D2：1次が10~20%で2次の方が3次より10%以上多い。D3：同じく、3次の方が10%以上多い。E1：1次が10%以下で2次と3次の差が10%以内。E2：1次が10%以下で2次の方が3次より10%以上多い。E3：同じく、3次の方が10%以上多い。前回発表した論文では⁽⁷⁾15区分であったが一部修正した。

各市区町村がいずれのカテゴリーに属すかを判定してゆくが、図4-4に示すように、1次産業就業者率をa(%), 2次をb(%)とすれば、中心線は $b=50-a/2$ であり、中心線から±5%の領域は $55-a/2 \geq b \geq 45-a/2$ で、1次関数の直線で判別できる。まず1次の値をみてA, B, C, D, Eのいずれかを判断し、C, D, Eについては境界線近くに値がくる場合のみ、 $b=55-a/2$ または $b=45-a/2$ を計算して、これより大きい小さいかをみれば済む。

関東1都6県の全市区町村について、昭和40年(1965)、50年(1975)、60年(1985)の別に11の各カテゴリーに含まれる頻度数と%を示したのが表1である。この表によれば、昭和40年(1965)においてはAが28%、Bが27%、合わせて全市区町村の過半数で1次の値が40%以上あった。昭和50年(1975)にはAは僅か2%、Bは20%に、60年(1985)になるとAは0%、Bは4%に減少した。これに対し、Eは昭和40年では19%であったが、50年には32%、60年には44%に達し、全市区町村の半数弱が1次が10%以下の都市型になった。C, Dについては、C1, D1の割合が最も高いが、C2, D2の2次優位型よりはC3, D3の3次優位型の方が多い。またC2は40年、50年、60年とも3~4%であるが、D2になると1~2%に減る。Eの場合も同様でE2は1~2%にすぎない。EではE1よりも3次優位型のE3が多く、40年で11%、50年で22%、60年で34

図 4-3 本論文における三角ダイアグラムのカテゴリー区分
 Fig. 4-3 Classification of categories on trilinear chart used in this paper.

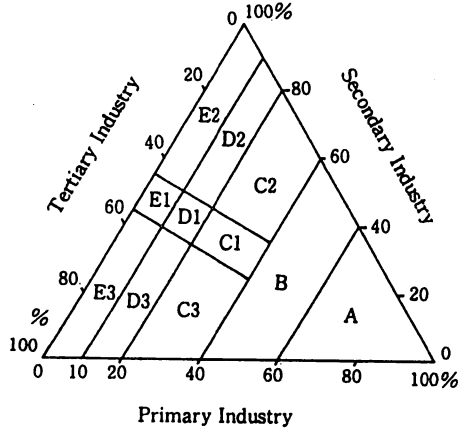


図 4-4 カテゴリー区分の判別に使うグラフ
 Fig. 4-4 Graph to be used for judging the category of each shi, ku, machi, and mura

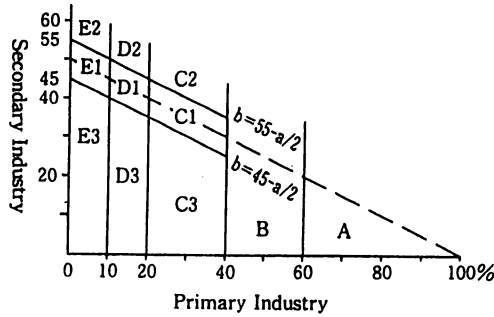


表 1 関東地方、各カテゴリーに含まれる市区町村数および%
 Table 1 Numbers and percentage of shi, ku, machi, and mura in the Kanto District belong to each 11 category

年	カテゴリー											計
	A	B	C1	C2	C3	D1	D2	D3	E1	E2	E3	
昭和40年 (1965)	137 27.5	134 26.9	57 11.5	18 3.6	23 4.6	15 3.0	8 1.6	14 2.8	31 6.2	9 1.8	52 10.5	498 100.0
昭和50年 (1975)	8 1.6	97 19.7	74 15.1	17 3.5	69 14.0	38 7.7	5 1.0	27 5.5	41 8.3	9 1.8	107 21.8	492 100.0
昭和60年 (1985)	1 0.0	18 3.6	77 15.6	14 2.8	64 12.9	59 11.9	10 2.0	34 6.9	44 8.9	4 1.0	170 34.4	495 100.0

上段：市区町村数 下段：%

%にもなる。1次の値の減少が大きいほど、すなわち都市化が進むほど第3次産業就業者の割合が増加することが明らかである。

4. 三角ダイアグラムのカテゴリー区分にもとづく市区町村別コロプレスマップの作成

三角ダイアグラムの11のカテゴリー区分にもとずき、関東地方について産業大分類別就業人口構成比の市区町村別コロプレスマップ（行政区画別色相区分図、ここでは白黒で表現）を、昭和40年（1965）、50年（1975）、60年（1985）について作成した。図1-1～12の都道府県別のグラフで、東京の就業人口総数は、昭和25年（1950）以降急上昇していたのが昭和40年（1965）から横ばいに転じたこと、神奈川県が昭和25年以降、埼玉、千葉両県が30年（1955）以降ずっと上昇していること、茨城県が遅れて40年（1965）から微増し、50年（1975）からは栃木、群馬両県よりも上昇角度が大きくなっていることをみた。この地域的広がりや10年毎の変化の地域差を図で明らかにしようとした。

昭和40年（1965）の図5-1でE3の範囲は、東京区部の中心部から福生以東の東京西郊（東京都の東半）、神奈川県の横浜、横須賀、鎌倉、葉山、埼玉県の浦和、大宮、福岡（上福岡市）、千葉県の船橋、習志野、松戸と、少し離れた茨城県の古河のほか、日光、草津、伊香保、箱根、真鶴などの観光・保養地である。E2は東京墨田区、埼玉県川口、戸田、横浜市鶴見区、川崎市（まだ区制になっていない）、茨城県日立、群馬県桐生、栃木県足尾である。E1は東京の周辺部の区すなわち江東、品川、荒川、板橋、足立、葛飾、江戸川各区および西方の青梅、八王子、羽村、昭島、神奈川県東部の横浜の一部の区、藤沢、茅ヶ崎、相模原、大和、埼玉県南部の与野、草加、蕨、鳩ヶ谷、朝霞、大和（和光市）、千葉県市川市である。これに対しA、Bは千葉県、茨城県から栃木県西半、群馬県、埼玉県北半に広い面積を占めている。

昭和50年（1975）の図5-2になると、E3は東京を中心に神奈川県、埼玉県南部、千葉県北西部に拡大した。E2に加わったのは神奈川県寒川、開成、愛川、栃木県足利、群馬県大泉である。E1は東京、神奈川、埼玉南部において広い面積に広がった。また関東北部では水戸、宇都宮、藤原、高崎、新町が加わった。一方Aは千葉県と栃木、群馬両県に僅かに残るのみとなり、Bは茨城県に最も広く、群馬県北部、西部、栃木県北部、千葉県北東部、南部にややまとまって残っている。

昭和60年（1985）の図5-3ではE3の拡大が顕著で、東京、神奈川では東京湾岸、相模灘から西部山地の一部を除く大部分、埼玉では栗橋以南、鴻巣以南、鳩山以南、千葉県では野田以南、我孫子以西、成田以西、茂原以西、東京湾岸は市原までそれぞれ鉄道沿いに伸び、連続した。関東北部においては点的であるが、茨城県の土浦、桜村、取手、神栖、那珂湊、栃木県の栃木市、栗山村、群馬県の水戸、渋川、前橋、埼玉県の熊谷が新たに加わった。E1も埼玉県中部～北部、群馬県南東部、栃木県南西部にさらに広がり、また昭和50年（1975）にE2

図 5-1 産業大分類別就業人口構成比 関東地方 市区町村別コロプレスマップ 昭和40年(1965)

Fig. 5-1 Cholopleth map of shi, ku, machi and mura divided into 11 categories of employed persons by industry (major groups), the Kanto District 1965

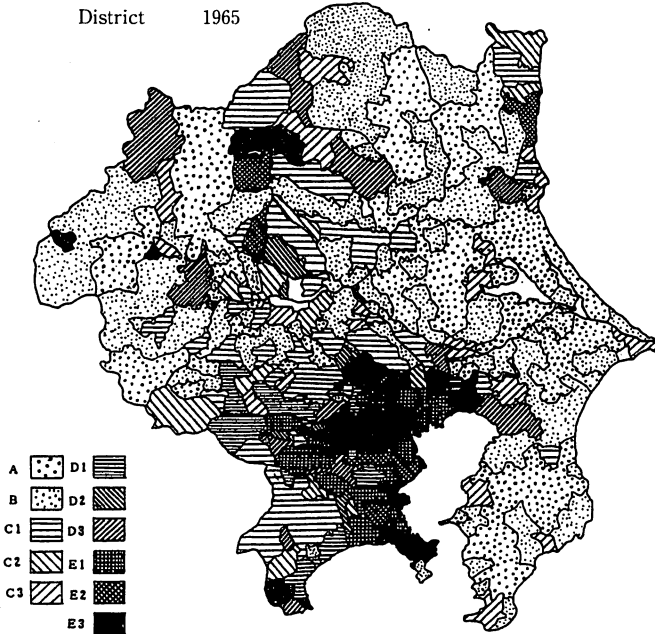


図 5-2 産業大分類別就業人口構成比 関東地方 市区町村別コロプレスマップ 昭和50年(1975)

Fig. 5-2 Cholopleth map of shi, ku, machi, and mura divided into 11 categories of employed persons by industry (major groups), the Kanto District 1975

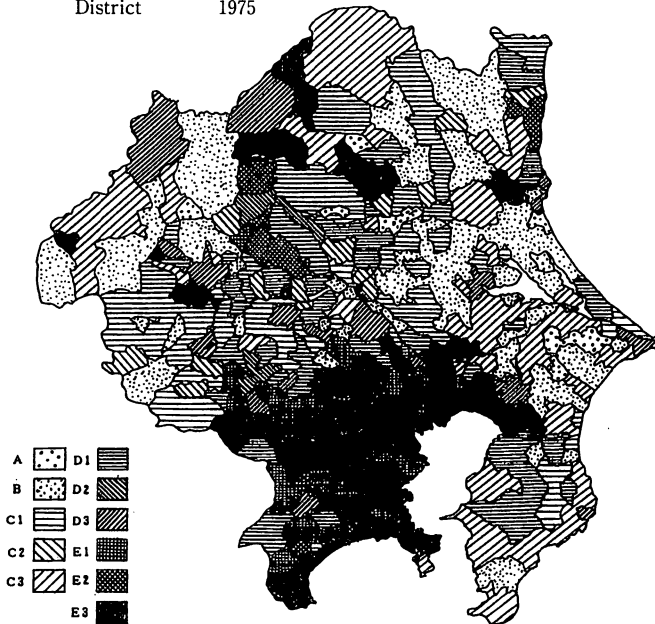
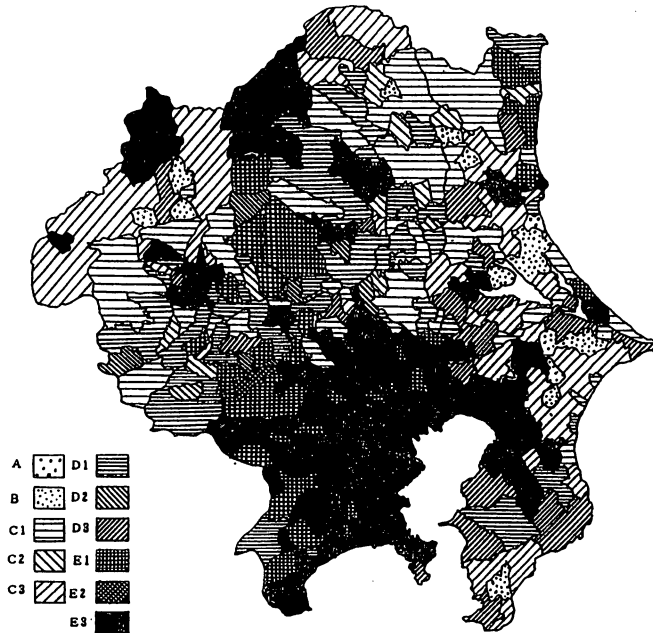


図 5-3 産業大分類別就業人口構成比 関東地方 市区町村別コロプレスマップ 昭和60年(1985)

Fig. 5-3 Cholopleth map of shi, ku, machi, and mura divided into 11 categories of employed persons by industry (major groups), the Kanto District 1985



であった日立、足尾、足利、桐生がE1に変わった。一方Aは全くみられなくなり、Bが千葉県、群馬県、栃木県に散在するのみとなった。

5. 関東地方における昭和40年(1965)～60年(1985)の変化

関東地方における第1次産業就業者率は、昭和40年(1965)において既に東京で1.5%、神奈川で6.1%、その他の県では22～46%であったが、その後急速に減少、60年(1985)には全都県で17%以下になる。1次の比率が10%以下のE(E1, E2, E3を合わせた範囲)が昭和40年、50年、60年でどう拡大していったかを一枚にまとめたのが図6-1である。40年には東京の大部分と神奈川東半に、埼玉南東部、千葉北西部の狭い範囲を加えた程度であったのが、10年後の50年には東京、神奈川の大部分、埼玉南東部、千葉北西部の外縁に拡大し、北関東の県庁所在地級の都市に及ぶ。その10年後の60年には埼玉、千葉のさら

九二

に外側のほか、北関東にも点々と出現した状況が明らかである。
これを裏側からみる形で第1次産業就業者率40%以上(A, B)の範囲の昭和40年(1965)、50年(1975)、60年(1985)の変化を一枚にまとめたのが図6-2である。60年に1次の値が40%以上あるのは千葉県北東部と南部、茨城県東部と北部、群馬県北部の小面積に過ぎない。10年前の50年には茨城、栃木、群馬、千葉にかなりの面積があった。さらに10年前の40年には千葉、茨城、栃

図 6-1 第 1 次産業就業者率 10% 以下の区域の変化
関東地方 市区町村 昭和 40 年(1965), 50
年(1975), 60 年(1985)

Fig. 6-1 Change of areas less than 10% of em-
ployed persons by primary industry, shi,
ku, machi, and mura, in 1965, 1975 and
1985

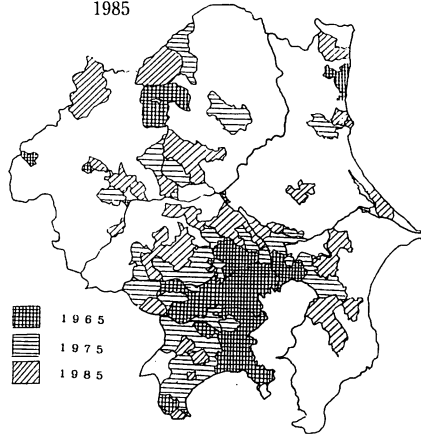
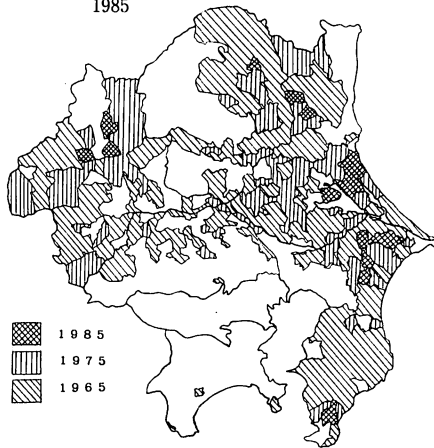


図 6-2 第 1 次産業就業者率 40% 以上の区域の変化
関東地方 市区町村 昭和 40 年(1965), 50
年(1975), 60 年(1985)

Fig. 6-2 Change of areas 40% and over of em-
ployed persos by primary industry, shi,
ku, machi, and mura, in 1965, 1975 and
1985



九一

規模団地の建設等が行われ、鉄道の開設や地下鉄乗り入れなどによる都心との時間距離短縮とあいまって、都心からかなり遠い地価の比較的安い所で住宅が増加した。都心部はドーナツ化現象で就業人口数が減少しているが、1次産業就業者はもう殆どおらず、2次も減少して第3次産業就業者率が高くなる。これを取り巻くかなり広い外縁部では、都心からと農村部の双方からの流入人口を受け入れ、その多くが第3次産業就業者であり、元からの居住者も1次、2次から3次産業

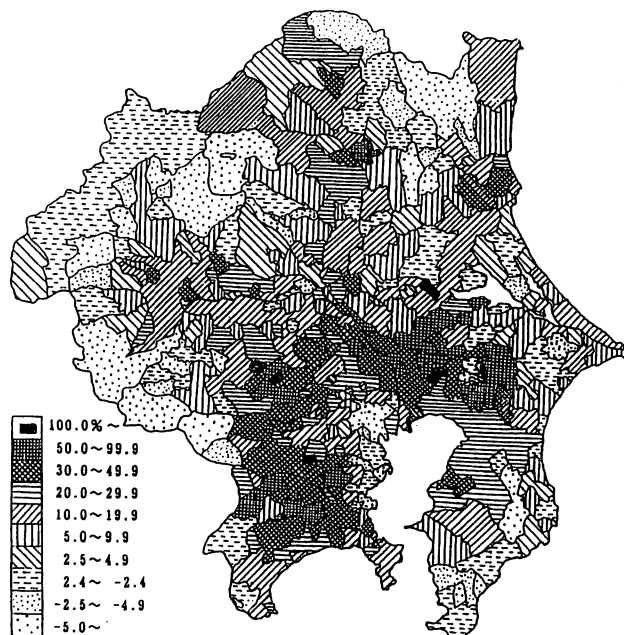
木、群馬、埼玉北半に広がっていた様相が明瞭に示されている。

産業大分類別就業者構成比と就業者総数の変化はどのような関係があるのか。構成比が変わるのは、就業者総数の増減(流出、流入)による場合と、流出入は余りなく1次産業就業者から2次、3次へと内部で変化する場合とがある。昭和50年と60年の国勢調査の15歳以上就業者総数の資料で10年間の増減率を市区町村毎に出した。60年の就業者総数をL、50年のそれをMとして、 $\{(L - M) \div M\} \times 100$ を計算する。+2.4~-2.4を微増減とし、増加を2.5%~, 5.0%~, 10.0%~, 20.0%~, 30.0%~, 50.0%~, 100.0%~, 減少を-2.5%~, -5.0%~の10階級に区分する。

これにもとづいて、市区町村別コプロスマップを作成したのが図7-1である。東京都心部~横浜はこの時期既に就業者数の減少もしくは微増減の区域であり、その外側の東京西部、神奈川中部、埼玉南東部、成田周辺の千葉県北西部、茨城県南東部にかけてが30%~, 50%~の増加地帯を形成している。100%以上増加というも茨城県桜村、埼玉県鳩山町、鶴ヶ島町、東京都多摩市、千葉県白井町、浦安市にみられる。

研究学園都市、新東京国際空港、大

図 7-1 15歳以上就業者総数の昭和50年(1975)から60年(1985)における変化
 Fig. 7-1 Rate of change from 1975 to 1985 of employed persons 15 years of age and over by industry, shi, ku, machi, and mura



$$\left\{ \frac{\text{昭和60年就業者総数} - \text{50年就業者総数}}{\text{50年就業者総数}} \times 100 \right\}$$

$$\left\{ \frac{\text{Total of employed persons in 1985} - \text{Total of employed persons in 1975}}{\text{Total of employed persons in 1975}} \times 100 \right\}$$

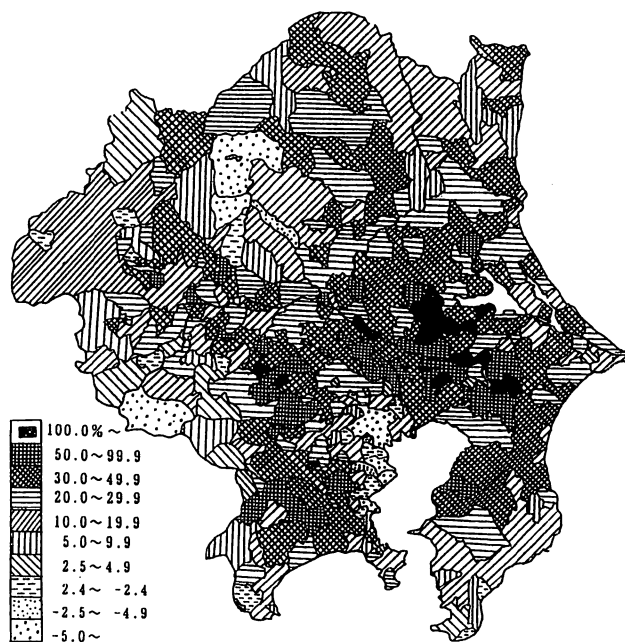
就業者に替わってゆく。山間部は就業人口が減少するが、観光・保養地は微増減となっている。

就業者総数ではなく、2次、3次産業就業者だけの10年間の増減をみた。昭和60年(1985)の就業者総数をS、第1次産業就業者数をs、50年のそれをT、tとし、

$\{(S-s) - (T-t)\} \div (T-t) \times 100$ を市区町村毎に計算し、図7-1と同じ階級区分をして図7-2を作成した。総数の増加数は少なくとも、1次が減少したり、2次、3次産業就業者数が増えるところは大きくなるので、1次の値が高い農村地域でも増加率の高い地域として現れている。この図で、30%~、50%~の階級が千葉、茨城、栃木、群馬各県において図7-1に比べより外縁部にまで広くみられる。100%以上の増加率を示す所として、図7-1で現れた所のほか、茨城県南部の谷田部、伊奈、莖崎、牛久、美浦、利根、千葉県北部の栄町、富里、酒々井、関宿が加わる。また、-2.5%以上減少している所は、都心部と栃木県日光市、足尾町、葛生町、群馬県東村、埼玉県大滝村など限られてくる。図7-1で就業者総数が減少あるいは横ばいの過疎地として現されている所でも2次、3次就業者率は増加しているのである。

九〇

図 7-2 15歳以上第 2 次, 3 次就業者数の昭和50年(1975)から60年(1985)における変化
 Fig. 7-2 Rate of change from 1975 to 1985 of employed persons 15 years of age and over by secondary and tertiary industry, shi, ku, machi, and mura



{(昭和60年第 2 次, 3 次就業者 - 50年第 2 次, 3 次就業者) ÷ 昭和50年第 2 次, 3 次就業者} × 100
 {(Employed persons by secondary and tertiary industry in 1985 - Employed persons by secondary and tertiary industry in 1975) ÷ Employed persons by secondary and tertiary industry in 1975} × 100

おわりに

大正 9 年 (1920) 以降の産業大分類別人口構成比の三角ダイアグラム作成によって明らかになったことは 1) 全都道府県で第 1 次産業就業者率の減少が第 2 次世界大戦後の昭和 25 年 (1950) から急速に進んでいる。2) 線グラフの形としては 2 次の比率が余り増加せず緩傾斜をなすもの、かなり高い所まで増加し急傾斜をなすもの、1 次の値が低いところから出発し特異な変化を示すものと 3 タイプに分けられる。3) 2 次の増加は 30%, 40% まで、最高でも 50% が限度である。昭和 40 年 (1965) ~ 50 年 (1975) から、2 次の増加が止まり 3 次が増加し始め、屈折点をもつ県が現れる。4) 1 次の値は際限なく減少し、D.I. D. や大都市では 3 次の値は経年的に高くなり、昭和 60 年で 70% までいっている。

八九

産業大分類別就業人口構成比の三角ダイアグラムによるカテゴリー区分としては、関東地方の昭和 40 年 ~ 60 年の変化をみる目的で、1 次の減少段階に応じ A ~ E の 5 つに区分し、C, D, E については 2 次と 3 次の差が 10% 以内のものと、10% 以上に分け、後者については 2 次優位型と 3 次優位型に分ける方法を

とった。11の各カテゴリーに属す市区町村の%をみると、1次が10%以下のカテゴリーでは3次優位型が多く、このE3タイプが昭和60年（1985）において関東地方の全市区町村の1/3にもなっていることが分かった。11のカテゴリー区分にもとずき関東地方について市区町村別に昭和40年、50年、60年のコロプレスマップと、20年間の変化をまとめた図を作成し、同一カテゴリーに属す地域の変化をみた。1次の値が10%以下のE（都市的地域）が東京を中心に西部から南部、北部、東部へと拡大していった範囲、反対に1次の値が40%以上のA、B（農村的地域）が減少していった範囲を具体的に明らかにした。Eのうちでも3次優位型のE3に属す市区町が昭和50年～60年急増しているが、このE3の範囲は東京、神奈川の山地を除く大部分、鉄道沿いに埼玉南部、千葉北東部から茨城南部の一部を加えた広い地域を形成している。関東地方で最も1次優位型であった茨城県でも常磐線沿線、つくば研究学園都市でE3化が始まった。千葉県の東部、南部はまだ残っているが、栃木、群馬両県では新幹線開通による東京との時間距離短縮の影響が出始めたところであろう。第3次産業就業者率はダム建設地、観光開発地、温泉・保養地などでも高く、離れて山間に点在する。

就業人口総数は昭和40年（1965）、東京都心～横浜で既に減少し、周辺部で増加するドーナツ化現象がみられるが、40年～60年、交通の利便性の増加と相俟って、都心からかなり離れたところまで就業人口の急増があり、ドーナツの外縁が拡大した。就業人口総数が減少した都心も、第3次産業就業者の比率は上がり続けるので、E3の地域の縮小やドーナツ化はみられない。1次の値が比較的高い農村地域でも、2次+3次産業就業者数の10年間の変化を比較すると増加しており、このような農村地域は千葉県東部、茨城、栃木、群馬各県にみられる。

掲載図のパソコン図化については夫の瀬戸孝夫の援助を受けた。

本稿は1992年8月、日本国際地図学会定期大会（於郁文館学園）における発表に加筆修正をしたものである。

注

- 1) 第1次産業：A農業、B林業、C漁業。第2次産業：D鉱業、E建設業、F製造業。第3次産業：G電気・ガス・熱供給・水道業、H運輸・通信業、I卸売・小売業・飲食店、J金融・保険業、K不動産業、Lサービス業、N公務。
- 2) D.I.D.：Densely Inhabited District、人口集中地区。昭和35年国勢調査以後設けられている。人口密度1km²あたり4,000人以上の調査区が市区町村内で互いに隣接して、人口5,000人以上の地域を構成している所

文献・資料

- (1) 佐藤甚次郎（1971）：『統計図表と分布図』p.122～124 古今書院
- (2) 橋本良一（1975）：主題図における三角グラフの適用例と問題点 地図13-3
- (3) 木内信蔵（1951）：『都市地理学研究』p.371 古今書院
- (4) 建設省国土地理院編集（1977）：『日本国勢地図帳』(財)日本地図センター
- (5) 建設省国土地理院編集（1990）：『新版日本国勢地図帳』(財)日本地図センター

- (6) 建設省国土地理院編集 (1984): 『地域計画アトラス, 国土の現況とその歩み』(財日本地図センター)
- (7) 瀬戸玲子 (1992): 産業大分類別就業人口構成比の1965~1985年における変化—三角ダイアグラムを使った市区町村別コロプレスマップの作成による考察—お茶の水地理第33号
- 総理府統計局: 昭和40年国勢調査 全国都道府県市区町村人口総覧 都道府県の部
- 総理府統計局: 昭和45年国勢調査解説シリーズ No.1, わが国の人口
- 総理府統計局: 昭和45年国勢調査解説シリーズ No.2, 都道府県の人口
- 総理府統計局: 昭和45年国勢調査報告 第3巻 都道府県・市区町村編
- 総理府統計局: 昭和50年国勢調査解説シリーズ No.1, 我が国の人口
- 総理府統計局: 昭和50年国勢調査解説シリーズ No.2, 都道府県の人口
- 総理府統計局: 昭和55年国勢調査解説シリーズ No.1, 我が国の人口
- 総理府統計局: 昭和55年国勢調査解説シリーズ No.2, 都道府県の人口
- 総務庁統計局: 昭和55年国勢調査報告—最終報告書 (資料編) —日本の人口
- 総務庁統計局: 昭和60年国勢調査解説シリーズ No.1, 我が国の人口の概観
- 総務庁統計局: 昭和60年国勢調査解説シリーズ No.2, 都道府県の人口
- 総務庁統計局: 昭和60年国勢調査報告—最終報告書 (資料編) —日本の人口
(本学教授・地理学)

Study of change in population structure by industry
(major groups) by compilation of the choropleth maps, in
the Kanto District from 1965 to 1985

By : Reiko Seto

Following the statistical tables of each Population Census from 1920 to 1985, an increase in total employed persons 15 years old and over by industry (major groups), and percentage in primary, secondary, and tertiary industry for each prefecture are drawn on graphs (Fig. 1-1~12) and on trilinear charts (Fig. 2-1~12). From these figures we can see a rapid decrease in percentage of employed persons by primary industry since 1950, and an increase in tertiary industry employment since 1965, in almost all prefectures. In the urbanized prefectures, the percentage of employed persons by primary industry was already low at the start of 1920, and trend of lines are complex. We can see also the different types of line patterns.

Concerning sample prefectures, each dot per shi, ku, machi, and mura was plotted on trilinear charts according to the percentage of employed persons by primary, secondary and tertiary industry (Fig. 3-1~5). From these charts, 11 different categories were classified based on the combination of percentage of employed persons in each industry. Firstly, percentage of primary industry was divided into 5 categories; A): 60% and over, B): 40~60%, C): 20~40%, D): 10~20%, E): less than 10%. C, D and E were further subdivided according to the difference of percentage of secondary and tertiary industry as follows: 1): difference between secondary industry and tertiary industry is less than 10%, 2): secondary industry is 10% over tertiary, 3): tertiary industry is 10% over secondary (Fig. 4-3~4). The percentage of shi, ku, machi, and mura in 1965, 1975, and 1985 in the Kanto District belong to each category is shown on Table 1.

Following these 11 categories, three sheets of choropleth maps of shi, ku, machi, and mura for 1965, 1975, and 1985 in the Kanto District were compiled (Fig. 5-1~3). Fig. 6-1 shows how the <E> area had been widely spread around Tokyo since 1965. Fig. 6-2 shows how the <A+B> area had been widely reduced during the same period.

The total of employed persons and employed persons by secondary and tertiary industry on 1985 relative to 1975 decreased in the central Tokyo district in contrary to the surrounding area which showed a high percentage of increase (Fig. 7-1~2). But the percentage of employed persons by

tertiary industry did not decrease in the central Tokyo district (Fig. 5—3). In the rural areas, the total of employed persons decreased (Fig. 7—1), but in some districts employed persons by secondary and tertiary industry increased in 1985 relative to 1975 (Fig. 7-2).

比喩的認識と場所イメージ

内 田 順 文

はじめに

我々は日常生活の中で、たえず外部の世界を認識し、またそれを伝達するために表現している。そのなかには、毎日見慣れた外界の対象を再度認識する場合もあれば、まったく初めての対象と出会う場合もあろう。おそらく、多くの場合の認識や表現は、ある種の制約に従う慣習的なものになるだろうし、あるいは常識を打ち破った独創的な方法がとられるかもしれない。筆者はさきに場所イメージにかかわる概念的な研究の枠組みについて考え、場所イメージの記号化⁽¹⁾に関連するものの一つとして比喩的認識のあることを紹介した。そこで示したように、比喩が人の「ものの見方」と密接に関係していることから、場所に対する比喩的な認識とその表現は、世界観・環境観などを包含した地理的イメージの核心部分にも迫り得るものであると思われる。本稿は、我々の日常生活における外界（環境）の理解に際して、場所に対する比喩的な認識が重要な役割を果たしており、場所イメージの記号化を促進する一因となっていることを明らかにする。

比喩（比喩表現）を扱う学問として、レトリック（rhetoric：修辞学）がある。古代・中世を通じて、天文学・哲学・詩学などと並ぶ重要な学問であったレトリックは、今世紀に入ると急速に忘れ去られ衰退した。それはレトリックが単なる美文や巧言の技法とみなされ、その社会に対する重要性が著しく低くなったからであるが、最近になって、レトリックを言表の想像性あるいは発見的認識との関係から捉え直してみようとする立場が現れ、新しい論議を展開している⁽²⁾。本稿も、まさにこれらと同じ考えに基づいて、比喩的認識を扱うものである。おそらく比喩的關係に基づく認識は、対象についての発見的認識そしてその理解のための方略として働いており、個人の環境認知とも深く関わっている。そして、それが適切な認識で、他の人の共感を得られるようなものであれば、その結果としての比喩的表現は多くの人に理解され、共通化し、いずれステレオタイプ（決まり文句）となって記号化していく本質を持っており、いったん記号化した比喩的表現は、それをを用いる人々の認識方法に影響を及ぼし、逆にそれを規定するようになると考えられる。

このような観点からの比喩や比喩的認識に対する新しい興味は、一般的に近年盛んになってきているようであるが、地理学の論文で比喩的認識ないし表現を扱った例はまだ少なく、最初に取り上げたのは、おそらく Tuan であろうと思われる

九六

る。Tuan は直喩と喩喩を感情を伴う一種の記号として、共感覚とともに人の思考や認識に関係することに触れている⁽³⁾。Livingstone & Harriton は、場所に関する喩喩表現を取り上げ、それが類似性に基づく場所のイメージであることを指摘し、さらにいわゆる「死んだ」喩喩（彼らはそれを神話と呼ぶ）についても言及した⁽⁴⁾。また、Mills は、時代ごとの世界観を表す喩喩として The Book of Nature と Humanity as the Mole と The Earth Machine の三種の喩喩を取り上げて、時代の変化に伴う人間の環境に対する認識方法の変化を、解釈しようとしている⁽⁵⁾。なおこのほかに、メンタルマップが実在するのか、あるいは説明のための喩喩にすぎないのか、という点に関する論争があるが、本稿でいう喩喩的認識とは直接は関係がない⁽⁶⁾。

このように、喩喩的認識の方法は環境認知、そしておそらく地理的イメージとも密接な関係を持ち、その理解に対して有効な示唆を与えると考えられるのであるが、地理学において喩喩的認識を扱った研究は極めて少数で、しかもその対象は直喩と喩喩に限られているのが現状である。そこで本稿は、場所に関する認識や表現の方法を、喩喩という観点から捉えなおして、場所イメージの記号化との関係を検討する。

1 喩喩的認識について

従来、レトリック上の喩喩法の種類には、諷喩・活喩（擬人法）・張喩（誇張法）など多くの分類が設けられてきたが、本稿では場所イメージととくに関連が深いと考えられる、直喩・喩喩・換喩・提喩について取り上げることにする⁽⁷⁾。

直喩 (simile) と喩喩 (metaphor) は、ある事物によって、それと似ている別の事物を表す喩喩法で、「苺のような匂い」や「彼は犬のように死んだ」といった表現は直喩の、「男はみんな狼だ」や「頭から湯気を立てて怒る」のような表現は喩喩の例にあたる。直喩と喩喩はともに喩えるものと喩えられるもの（隠されている場合もある）との間の類似性を提案するもので、その両者の関係が表現中に明示されているか否かによって直喩と喩喩に分けられる。因みにいまの喩喩の例では、男と狼、頭とやかん (?) が、それぞれ似ているものとして喩えられていることになる。このとき喩えるものと喩えられるものとの関係が、通常では結びつきそうにない意外なものであるほど、喩喩の効果は一般に大きい。つまり、もともと直喩と喩喩は二つの対象間の「類似性」に基づき、同時にそれは類似性に関する発見的な認識に由来するものであるということが出来る。ここでは直喩と喩喩（そして喩喩的表現）のもととなる対象の認識方法を、一括して喩喩的認識と呼ぶことにする。

さらに、こうした喩喩表現が成功し多くの人に受け入れられて通俗化すると、ステレオタイプとなって、いわゆる「死んだ」喩喩（死喩または転訛表現）になる。その例は、「椅子の脚」（人や動物の脚からの喩喩）・「入り口・出口」（同じく人の口から）・「成績が上がる」（上方を善とする方向性の喩喩）・「問題を解

く」(問題をもつれた紐に喩える)・「時を浪費する」(時を「流れる水」に喩え、さらに水と同じく資源に見立てた)など、我々の身の回りに無数に見つけることができ、隠喩的認識が我々の日常的な意識や思考のなかに深く入り込んでいることがわかる。これを逆に言い替えれば、ステレオタイプ化した比喩は、我々の共通な比喩的認識に基づいて成立しているのである。

換喩 (metonymy) は、ある事物を、その事物に隣接する別の事物によって喩える比喩法で、例えば「一升瓶を飲み干す」の一升瓶が瓶の中身の酒を指したり、「春雨やものがたり行く蓑と笠」という句の中で、蓑と笠がそれぞれ蓑・笠をつけた人を意味しているのがこれにあたる。いわば「隣接性」に基づく比喩とすることができ、ここでいう隣接性とは喩えるものと喩えられるものが、容器と中身、作者と作品、全体と部分、⁽⁸⁾原因と結果というように相互に近接した関係にあることをいう。換喩がステレオタイプ化した例としては、「鍋が煮える」(本当は鍋の中身が煮えている)・「川が氾濫する」(氾濫するのは川の水)・「トルストイを読む」(彼の作品を読む)・「手を洗う」(トイレに行く)・「ユニフォームを脱ぐ」(引退する)などの慣用句がある。

提喩 (synecdoche) は、ある事物(種)を、その事物の意味の外延的全体である類概念によって喩える、あるいはその逆に、種としての事物によって類全体を喩える比喩法で、「花見に行く」の花(類)が桜の花(種)を意味し、「人はパンのみにて生きるにあらず」のパン(種)が食べ物一般(類)を指すのがこれにあたる。いわば「意味の包含関係」に基づく比喩とすることができ、類で種を表す例としては「飲む・打つ・買う」(酒を・博打を・女を)・「ブッダ」(本来は「悟った人」の意だが、一般にはゴータマ・シッダルタを意味する)などが、種で類を表す例としては「小町」(美人の代名詞)・「マジック(インキ)」(商標名が普通名詞的に用いられる)などが、ステレオタイプ化している。

このように直喩・隠喩・換喩・提喩は我々の日常生活のあちこちに見られ、また、これらの比喩がステレオタイプ化した結果、比喩であることにすら気付かずに一般的な慣用句として使用されている例は多い。これらの比喩的表現のもととなる比喩的認識についても同様で、我々は日常それとは気付かぬうちに、いろいろなものを認識し理解する際にこの「比喩的なものの見方」に従っている。しかも、対象の中の類似性に着目するか、隣接性に着目するか、意味の包含関係に着目するかで、その認識方法も異なってくる。

それぞれの比喩的認識に基づく対象の認識方法の違いは、例えば、初対面の人にあだ名をつける際の状況を考えてみると理解しやすい。初対面の相手はまったく初めての情報のかたまりであるから、主体は相手の情報をできるだけ早く得て、相手を認識の中にとらえる手がかりを何とか掴もうと知恵を働かせることになる。そして、相手の顔が何となく狐に似ていることに気付けば「狐(に似ている人)」というかたちで覚えられるだろうし、相手の掛けている眼鏡が印象的であれば「メガネ(をかけた人)」となるだろうし、相手の背が高いところに着目すれば

「(背高) のっぼ」という認識が出てくるであろう。言うまでもなく、第一の方法が隠喩的認識であり、第二が換喩的認識、最後が提喩的認識である。これは相手の外見(視覚によって得られた情報)に基づいた認識であるが、むしろ相手の声や匂いをはじめ、総合的な情報から対象を捉える場合も同様である。そして、こうした比喩的認識は、一定の集団内の人々に受け入れられることによって、容易にステレオタイプ化する。「狐」や「メガネ」があだ名として一般に(例えばクラスじゅうで)通じるようになる場合が、それである。

さらに重要なことは、いったんステレオタイプ化した比喩(「死んだ」比喩)が、我々のものの認識方法を反映していると同時に、無意識のうちにその方法を規定するようになることである。つまり、初対面のときに、自分の目の前にいる人のあだ名が「狐」だと聞かされれば、何となくその人の顔が狐のように見えてくるし、「メガネ」だと聞けば、いやでも眼鏡が目にはいる、といった具合に、すでにステレオタイプ化された表現によって、認識方法がその方向へと引きずられてしましやすいく。

これと全く同様のことが、場所に対しても起こる。対象としての場所を認識する際にも、比喩的な認識の方法がごく日常的に用いられ、往々にしてステレオタイプ化するのである。

2 場所の換喩的認識

対象を合理的に認識する際に最も簡単で多く用いられている方略は、その対象が他のものと異なっている点、すなわち独自の特徴を見つけ出すことであろう。つまり対象の備えている無数の属性の中から、その対象を際立たせ、目立たせている最も特徴的な属性を発見することを通じ、その属性によって対象を把握する方法である。これを場所に関する比喩的認識に当てはめて考えると、その場所が持つ部分(内容)によってその場所全体(容器)を喩える換喩的認識に相当する。本来、場所は一定の広がりを持っているから、その場所に立地する構成物が場所を指し示す道具となることは当然とも言える。

例えば「桜島」や「リアス式海岸」といった自然景観や、「みかん畑」や「工業用地」のような土地利用、「八幡製鉄所」や「兼六園」といった施設、「りんご」や「うちわ」といった産物、「西郷隆盛」や「坊っちゃん」といった人物や歴史的にその地とゆかりのあるもの等々、容れものとしての場所の中に存在する無数の構成物のうち、最も代表的なものによって場所が理解される方法がこれにあたる(もし、いま桜島と聞いて鹿児島を、うちわと聞いて丸亀を、坊っちゃんと聞いて松山を思い浮かべたとしたら、これらの特徴と場所の関係は相当に強いと考えられる)。このとき、場所を代表する要素は、その場所をその場所たらしめているもの、であると同時に、その場所を指し示す広義の記号としての役割も果たしており、いわゆる場所のシンボルに相当する。

このような換喩的認識の具体例として、わが国の都道府県のシンボル・イメー

ジのステレオタイプを取り上げ、示してみよう。第1表は都道府県別の地誌の表紙やタイトルページに用いられた写真や絵を一覧したものである。この種の本の表紙やタイトルページに用いられる写真や絵には、その都道府県のイメージを代表するシンボルや風景が選ばれることが多いと考えられるが、第1表を見ると、多くの都道府県においてそのシンボルがある決まったものに集中する傾向のあることがわかる。例えば、山梨県は「富士山」、富山県は「立山と黒四ダム」、長崎県は「グラバー邸」、熊本県は「阿蘇中岳」に集中し、青森県は「岩木山をバックにした津軽平野のリンゴ畑の景観」か「青森市のねぶた」、宮城県は「松島」か「仙台の七夕」、鳥取県は「砂丘」か「大山」が選ばれている。おそらく多くの人にとって、長崎港を背景にしたグラバー邸の景色が長崎県を、阿蘇山中岳火口の風景が熊本県を表現している、最も典型的なイメージとして理解されているのであろう。これらの場所と場所イメージの結びつきは「青森県といえばリンゴ」、「阿蘇といえば熊本県」というようにほとんど一対一で対応しており、その関係は狭義の記号（サイン）の域にまで達しているものと解釈できる。

その一方で、秋田県・千葉県・埼玉県・奈良県・山口県などのように、選ばれたシンボルがばらばらのところも存在する。おそらくこれらの県では、その県を代表するシンボルが多すぎるのか、またはこれといったシンボルが一つも存在しないのかのどちらかの理由で、都道府県とそれぞれのシンボルの結びつきが相対的に弱いと考えられる。したがってこれらの県では、ある決まった一つの場所イメージによってその県を理解し、また表現することが難しいのである。

このようにシンボルによって場所を代表させるという換喩的認識は、場所を理解する際の最も基本的な方法であるため、その利用範囲は多岐にわたり、場所を表現しようとするさまざまな場面で用いられている。とくに場所とシンボルとの関係が換喩的にステレオタイプ化している場合、その換喩的認識は死んだ比喩となって、場所イメージの内容を規定し、狭義の記号として新たな価値を帯びるようになるので注意が肝要だ。以下、その典型的な例をいくつか挙げて、記号となった換喩的認識の諸相を吟味してみたい。

土産品や記念写真の機能の一つは、ある特定の場所を他の人や自分自身に示す、まさに記号としての役割にあると思われるが、そのためには土産の品や記念写真は、行った場所を過不足なく明確に表現している必要がある。すなわち、京都の五色豆、名古屋の外郎、岡山のきび団子のように、土産品ははっきりとその土地を指し示す物でなくてはならず、おおかたの記念写真は、日光では陽明門を、広島では原爆ドームを、⁽¹⁰⁾パリに行けば凱旋門やエッフェル塔を背景にして撮られることになる。つまり、土産品や記念写真の画像によって示される場所イメージは、スムーズに誤解なくその場所を表現し得るもの、すなわち表現しようとする場所と記号的に結びついているものでなくてはならず、それを最も端的に行うのがシンボルを用いた換喩的表現なのである。その土地の代表的風景を写した絵はがきやその土地のシンボルをかたどったミニチュアが旅の記念品として買われていく

第1表 都道府県のシンボル・イメージ

	A	B	C	D
北海道	洞爺湖と羊蹄山 大雪山 利尻島鴛泊港 根室の海岸	石狩平野 洞爺湖 根釧原野 札幌付近の酪農場 藻沸湖と斜里岳	函館風景 大通公園 帯広市 宗谷岬 八甲田山 陸中海岸国立公園 塩釜港祭り かまくら はんこたんな (庄内) 五色沼の秋色 日立市 (日立製作所) 陽明門 谷川岳	札幌の大通り公園 ねぶた 岩手山と北上川 仙台の七夕祭り なまはげ 晩秋の月山を望む ミズバシウ咲く尾瀬沼 大洗海岸の日の出 日光山内 水上温泉と雪の谷川岳
青森	リンゴ園と岩木山	リンゴ畑		
岩手	八幡平	北上川		
宮城	松島	五大堂と松島湾		
秋田	八郎潟の干拓工事	酒造工場		
山形	蔵王高原より朝日連峰	山居倉庫		
福島	磐梯高原と五色沼	一切経山火口		
茨城	霞浦の水郷風景	霞ヶ浦の帆引き舟		
栃木	霧降高原のニッコウキスゲ	栗石返し (東照宮)		
群馬	榛名湖	赤城山麓の桑畑		
千葉	大吠岬	九十九里浜	成田山新勝寺	大吠岬
埼玉	長瀨	奥秩父	秩父路の巡礼 (武甲山)	秩父夜祭り
東京	東京駅と丸の内ビル街	都心のビル街	皇居・伏見櫓	銀座四丁目付近
神奈川	江の島の海	出航風景 (横浜港)	ヨコハマ・マリンタワー (横浜港)	山下公園
新潟	新潟市近郊の湿田 工事中の黒部第四ダム	浦佐の豪雪 薬師岳のカール	雁木 高岡の曳山祭り	佐渡のたらい舟 黒四ダム (と立山)
富山	国宝成巽閣の表門	金沢の裏通り	兼六園	能登の「波の花」
石川	越前岬付近	敦賀付近の山村	東尋坊	池田町水海の田楽能舞
福山	御坂峠から富士山を	富士	昇仙峡	甲斐駒より鳳凰山・富士
長野	朝の槍ヶ岳	木曾路	上高地	松本城
岐阜	白川村の合掌造り	高山の民家	高山祭り	長良川の鵜飼
静岡	金谷の茶畑	下田港	牧野原台地の茶園	富士山頂
愛知	名古屋城の天守閣	蒲郡	渥美半島のお花畑	名古屋のシンボル100 m道路
三重	伊勢神宮	大王崎燈台	夫婦岩と伊勢神宮	二見浦の日の出
滋賀	三井寺	近江八幡の水郷	比叡山の行者と長浜曳山祭	彦根城
京都	金閣	夜桜 (平安神宮)	金閣寺	平安神宮
大阪	大阪市役所と中之島	新淀川のアシ	通天閣	御堂筋
奈良	法隆寺	東大寺盧舎那仏	大仏殿遠望	西の京の黎明
和歌山	紀三井寺から和歌浦を	串本の橋杭岩	瀨峡	那智と滝と巫女
兵庫	神戸港の突堤	神戸の造船所	三宮センター商店街	姫路城天守閣
鳥取	大山	鳥取砂丘	鳥取の松葉ガニ	夕焼けの大山
島根	宍道湖	松江大橋 (宍道湖)	宍道湖夕景	宍道湖
岡山	後楽園	高梁川清音の放牧	温室マスカット	鷺羽山からの展望
広島	厳島神社の大鳥居	帝釈峡天然橋	平和記念公園	原爆ドーム
山口	岩国市の錦帯橋	下関港夜景	秋芳洞	錦帯橋
徳島	徳島市の阿波おどり	祖谷風景	阿波おどり	鳴門の渦潮
香川	金刀比羅宮から讃岐富士	観音寺	直島群島 (備讃瀬戸)	金刀比羅宮から讃岐平野
愛媛	石鎚山	南子の段畑	松山城	来島海峡の朝
高知	足摺岬	室戸岬	桂浜	高知城と太刀踊り
福岡	八幡製鉄所の高炉	八幡製鉄の煙突	博多どんたく	博多祇園追分笠
佐賀	面浮立	白石のレンコン畑	有田焼	面浮流
長崎	佐世保港夜景	グラバー邸	グラバー邸	グラバー邸の春
熊本	阿蘇中央火口丘と草千里	阿蘇中岳の噴火口	熊本城	阿蘇草千里
大分	湯布盆地から見た湯布岳	日田の材木流し	別府	三俣山とミヤマキリシマ
宮崎	日南海岸	日南海岸の波食痕	サボテン園 (日南海岸)	高千穂峡
鹿児島	鹿児島市から見た桜島	桜島黒神部落	桜島ダイコン	桜島の噴火口
鹿儿島	羽地内海	那覇市守礼門	繁栄する国際通り	守礼門

調査に使用した資料

- A 「日本地理民俗大系」、誠文堂新光舎、1960。 D 「日本の文化地理」、講談社、1968-69。
 B 「図説日本文化地理大系」、小学館、1961。 E 「日本人の県民性」、日本放送出版協会、1979。
 C 「新しい日本」、国際情報社、1963-66。 F 「日本の山河」、国書刊行会、1976-82。

E	F	G	H	I
羊ヶ丘	五稜郭 羅臼湖と羅臼岳	鴛泊から見た利尻山	北海道百年記念塔	上富良野の花畑
ねぶた ちゃぐちゃぐ馬こ 七夕まつり かまくら(横手) 冬の蔵王 裏磐梯と五色沼 偕楽園 東照宮陽明門 利根川と赤城山	岩木川と岩木山 北上川と岩手山 仙台駅と市街 本荘沖の白龍3号 蔵王お釜 塩屋崎(いわき七浜) 那珂川河口と那珂湊 大谷石採石場 尾瀬沼と燧岳	岩木山とリンゴ畑 胆沢の散村 松島 戸賀湾と目潟 月山 猪苗代湖と磐梯山 神栖・波崎の農業地帯 今市扇状地と日光街道 沼田付近の河岸段丘	東北新幹線と岩手山 美しい松島の日の出 日本一の深度・田沢湖 出羽三山のひとつ月山 大洗海岸の日の出 躍進する宇都宮市 妙義山の第四石門	りんごと岩木山 石川啄木の歌碑と岩手山 蔵王のお釜 八郎瀧の干拓地 蔵王(樹氷) 磐梯山と猪苗代湖 筑波山と菜の花畑 中禅寺湖と男体山 嬌恋村のキャベツと レタス畑 埼玉古墳 九十九里浜 池袋のサンシャイン60 横浜港
銚子燈台 長瀬 新宿副都心 横浜港	新東京国際空港 利根大堰 新宿副都心 横浜球場と横浜港	東京ディズニーランド 大宮駅周辺 西新宿副都心 油壺	人工衛星からみた千葉県 埼玉県庁 国会議事堂 京浜工業地帯	埼玉古墳 九十九里浜 池袋のサンシャイン60 横浜港
田植え(白根) 立山 兼六園 越前海岸 武田信玄像(甲府) 善光寺 美濃の山 富士山 名古屋城	先閑湾(佐渡) 立山 日本海岸(大聖寺) 高浜原子力発電所 南アルプスより富士山 姨捨山の段々畑 御獄山 由比海岸と富士山 テレビ塔とセントラルパーク	冬の湯沢町 黒部ダム 輪島市の朝市 東尋坊 富士山と大沢崩れ 槍ヶ岳 白川村の合掌集落 大室山 名古屋市中心街	新潟平野と弥彦山 富山市より北アルプス 金沢城と大名行列 深雪の永平寺 濃尾平野の木曾三川 日本を代表する富士山	佐渡おけさ 黒部ダム 秋の兼六園 東尋坊 富士山と河口湖 大正池と穂高岳 高山祭のからくり人形 富士山 名古屋城
真珠いかだ びわ湖 東寺塔と京都タワー 道頓堀 若草山焼き はっさくの収穫	英虞湾の筏と多島海 琵琶湖のえり網 京都御所 千里インターチェンジとニュータウン 法隆寺 潮岬	英虞湾 瀬田川大橋と大津 清水寺 大阪都心部 稗田の環濠集落 潮岬	真珠のふるさと英虞湾 大阪城 奈良県庁	英虞湾にうかぶ島じま 瀬田川と琵琶湖 祇園祭の山鉾巡行 丸ビルと市街地 東大寺の盧舎那仏 青岸渡寺三重塔と那智滝 ボートアイランド 鳥取砂丘 宍道湖の夕暮れ 吉備路 広島平和公園 関門橋 阿波踊り 宇和海と蜜柑畑 高知城 博多祇園山笠 佐賀平野のクリーク 大浦天主堂 阿蘇山中岳の火口 臼杵深田石仏 堀切峠に咲くハマユウ 桜島 海中のサンゴと海
うろこの家(神戸) 砂丘 出雲大社 岡山城 安芸の宮島 秋吉台 阿波踊り 讃岐うどん 道後温泉 土佐犬と桂浜	神戸港 大山山頂 邑智の段畑 岡山城と後楽園 宮島 萩市 鳴門スカイライン 高松駅と高松港 佐田岬 室戸岬	神戸市街 米子平野と大山 三瓶山 児島湾干拓地 尾道水道 秋吉カルスト 大鳴門橋 讃岐平野と讃岐富士 佐田岬 足摺岬	鳥取大砂丘 宍道湖の夕暮れ 吉備路 広島平和公園 関門橋 阿波踊り 宇和海と蜜柑畑 高知城	東大寺の盧舎那仏 青岸渡寺三重塔と那智滝 ボートアイランド 鳥取砂丘 宍道湖の夕暮れ 倉敷民芸館 厳島神社の舞楽 萩市の町なみ 大鳴門橋 讃岐平野のため池 佐田岬 高知平野のビニールハウス群 博多祇園山笠 佐賀平野のクリーク 大浦天主堂 阿蘇山中岳の火口 臼杵深田石仏 堀切峠に咲くハマユウ 桜島 海中のサンゴと海
博多山笠 有田焼 グラバー邸 熊本城 耶馬溪 鬼のせんたく板 桜島 守礼の門	関門橋 唐津城 グラバー邸 阿蘇中岳火口 湯布院盆地と湯布岳 日南海岸 佐多岬と開聞岳 竹富島	中州と福岡市街 佐賀平野とクリーク 九十九島 阿蘇中岳火口 湯布院盆地と湯布岳 えびの高原 上鶴島 波照間島	八幡製鉄所戸畑 阿蘇中岳 富貴寺の大堂 宮崎神宮 開聞岳	博多祇園山笠 佐賀平野のクリーク 大浦天主堂 阿蘇山中岳の火口 臼杵深田石仏 堀切峠に咲くハマユウ 桜島 海中のサンゴと海

九〇

G 「週刊朝日百科・世界の地理」、朝日新聞社、1984。

H 「ポプラ社の県別シリーズ」、ポプラ社、1976。

I 「ビジュアルワイド新日本風土記」、ぎょうせい、1988-89。 ※ 空欄は未刊または未見のもの

のも、そこに表現された映像や形がその場所を表す換喩として普遍性を持っている⁽¹¹⁾ことに由来する。

記号化した場所イメージの最も典型的な例である歌枕も、換喩的認識に基づいている。歌枕になった地名には、①富士・天橋立のような名勝・佳景、②宇都山・白河関のような交通の要衝、③衣川・姨捨山のような歴史的事件ゆかりの場所、④鶴ヶ岡・熱田のような信仰上の霊地、⑤憚の関・待不得山といった面白い地名、⑥信夫・八橋など先行作品に詠まれた場所、があると言われるが⁽¹²⁾、これらの地名が何故はじめに文学作品の題材として取り上げられ、それが一般化したかを考えると、その場所の風景が衆に抜きん出ていたり、交通上・信仰上重要であったり、過去の事件や文学がすぐに連想されたり、あるいはその地名に特徴があったりと、全てその場所が持っていた特徴に着目して地名とイメージが結び付けられたものであり、まさしく換喩的認識に依って作られているのである。

また、特産品や地場産業の製品などのように、生産される場所と結びついた製品の場合、その産地の地名が一種のブランドとなって価値を生み出していることがあるが、この原理もやはり換喩的認識に基づく。その代表例は陶磁器や漆器や織物といった伝統工芸品であろう。「萩焼」・「清水焼」・「輪島塗」・「会津塗」・「久留米かすり」・「丹後縮緬」など、必ず産地の地名が冠されているのは、特産物としての工芸品がその産地の換喩として働いた結果、産地の地名と製品の特質とが結びついて理解されるようになったからである⁽¹³⁾。

やはり土地と結びついた農産物の場合にも、同様のことが起こる。「三ヶ日みかん」・「宇治茶」・「新潟コシヒカリ」・「台湾バナナ」などは、他産地の品物より数割がた高い値で取り引きされるが、もともとは製品の品質の良さが高値の原因とはいえ、今日では産地名の持つブランド性に負うところが大きいのではないか。「松阪牛」・「比内鶏」・「名古屋コーチン」などの畜産品も同様で、産地間競争が激しくなる一方で食生活の高級化が進む今日、ブランド性を有する製品を持つことは、産地にとって非常に有利なこととなってきている。これらは単にその場所が大産地であるからというだけではなく、産地名が製品の品質を保証するような機能を持つ。それゆえに産地の地名を詐ったまがいものが登場することもあり、偽のスイス時計や新潟コシヒカリが摘発されたことは記憶に新しい。

このような特産物の産地名のブランド化が進むと、産地名が商品そのものを指す名称となることがある。これは一種の「死んだ」(ステレオタイプ化した)換喩であり、「大島」(つむぎ)・「西陣」(織物)・「コニャック」(ブランデー)・「バーボン」(ウイスキー)などが、その例として挙げられる。「瀬戸物」・「シャンパン」・「カマンベール(チーズ)」などは、同種の製品を代表する提喩としての働きが強まり、さらに一般化してほとんど普通名詞化してしまった。いまだでは、これらの名称がもともとは地名であったことを知る人すら少なく、名誉なことではあるが、ある特定の場所と製品との結びつきという点では、かえって結合度が弱まってしまった例である。

しかし、最も普遍的に行われてきた場所の換喩的認識の例は、伝統的な地理教育（とくに地理のテスト）においてであろう。例えば「苦小牧→製紙工業」、
「静岡県→お茶とみかん」、
「デトロイト→自動車工業」、
「ブラジル→コーヒー豆」というような場所と場所イメージの一対一の対応の記憶が、地理の問題を解く際に要求されることが多く、実際には苦小牧には食品工業もあれば建設業も小売業もあり、ブラジルではコーヒー豆以外にも小麦やジャガイモなど多くの種類の農産物が作られているのだが、それらをあえて捨象し、製糸工業やコーヒー豆という換喩だけで場所を表現してしまうような教育方針は、皮肉な見方をすれば、文字どおり換喩的認識によって世界を理解する方法を教えているともとれる。

3 場所の隠喩的認識

人には二者以上の対象に向かうと、その対象を比較し、自分が納得するかたちで秩序づけようとする心理的な働きがある。ここにいう対象の比較とは、対象のイメージの比較のことであり、これらのイメージ相互間に認められた相対的な関係に基づいて、それぞれの対象はある決まった体系のなかへ位置づけられている。そして、このような概念の体系（あるいは意味のネットワーク）の中で、イメージの類推性や近隣性の高いもの同士は、連合して相互の結び付きが強化されるであろう。この対象間の類似性に基づく相互関係の認識はまさに隠喩的認識であり、またそれを外言として表出したものが、直喩または隠喩（的表現）であると考えることができる。

場所を対象とする隠喩には、ある場所をある物に喩える場合と、ある場所を別の場所に喩える場合とが考えられるが、はじめに、場所と物との間の比喩的認識を考えてみると、これはいわゆる「たとえ」や「見立て」という、一種の表現の技法としてよく見られる。例えば、帝政時代から今日に至るまで、ロシア（ソ連）はどういうわけか熊に喩えられることが多いが、これは「ロシア」という地名に対応するロシアの一般的な場所イメージと、「熊」という記号表現に対応する熊の一般的なイメージとの間に、おそらく「巨大」・「鈍重」・「山の中（辺地に住む）」・「怒らせると怖い」などといった共通部分があるからだと考えられる。そして、このような場所と物との、ある意味では意外な類似性が、多くの人によって共通に認識され、またその比喩的表現がたびたび用いられると、両者の関係はステレオタイプ化し、ロシアと熊という名前同士の間に連合が起こって、ロシアと言えば自動的に熊が連想されることにもなる。

この種の隠喩的な表現の例は、「東洋の真珠」（香港）・「札幌の奥座敷」（定山溪温泉）・「東京砂漠」など無数に捜すことができるが、このような表現が定着しているのには、おそらく、香港は小さいが真珠のように光彩を放ち、定山溪温泉が札幌の背後に静かな保養地として存在し、東京（の景観、あるいはそこにおける人間関係）があたかも砂漠のように不毛で乾燥しきっている、という認識が一般にも成り立っているからであろう。

しかし、より地理的な意味で場所の認識またはイメージと関わっていると考えられるのが、場所同士が類似性によって結び付けられる場合、つまりある場所を別の場所によって示す隠喩的表現である。このとき隠喩的認識は、二つの地名に対応する場所イメージ同士の相対的な比較によって形成され、その間にある種の類似的な関係が発見され述べられることになり、さらに地名との連合を通じて場所イメージの記号化を促進する。したがって、場所同士に関する比喩的な認識は、喩えられた場所のイメージと、喩えた場所のイメージとの比較（とくに類似性）の問題に帰着し、両者の場所イメージのどの部分が共通点として認識されたかに関わってくる。さらに、場所を場所に喩えた比喩は、喩える側も喩えられる側も場所という同じカテゴリーに属するものになるので、両者を比較・定位し、その隠喩的認識の通用範囲を設定するという意味も含めて、「××（地名）の○○（地名）」というかたちの表現になることが多い。「東洋のマンチェスター」や「日本のチベット」や「土佐の軽井沢」といった表現がその例で、そこにはAという場所の中に存在するBという場所のイメージが、ちょうどCという場所におけるDという場所のイメージと似ている、という場所同士の構造的な類似性の認識を見ること⁽¹⁴⁾ができる。

例えば、開聞岳はその山の形が成層で、富士山によく似ていることから、一名「薩摩富士」と呼ばれているが、この隠喩的表現のもととなったのは、[薩摩：開聞岳＝日本：富士山]（薩摩における開聞岳の立場は、ちょうど日本における富士山のそれに似ている）という認識であったと考えられる。

この種の「××（場所）の○○（場所）」の隠喩は、喩える場所と喩えられる場所の双方の複合的な換喩的認識に基づく比較であると捉えることもできる。大阪を「東洋のマンチェスター」と呼ぶ例をとれば、「大阪」の換喩として「繊維工業」があり、一方「マンチェスター」の換喩としてもやはり「繊維工業」があって、両者の換喩である繊維工業という部分（場所イメージ）によって大阪とマンチェスターは似ているという隠喩的な認識が生じたのだと見ることもできるのである。

八七
このような隠喩的なものの見方は、ある意味で場所と場所との間の関係の認識であり、それは意識されている外の世界に一定の秩序、すなわち構造（ただし、その構造とは主観によって見いだされた構造であるが）を発見することにはほかならない。場所と場所の間にある構造を発見し、場所を構造的に認識していくことは、我々が外界（環境）を理解するうえでの有益な方法の一つとなっていると思われる。それは場所のもつ無数の属性のうちどの部分に着目して場所同士が似ている、または似ていないと感じるか、というレベルにまで還元することができる。

二つ以上の対象の類似性を比較する際の一般的な関係の認識には、①対象同士の形態の類似性に着目する相似の関係、②対象同士の機能の類似性に着目する相同の関係、③一定レベルの類似性を認めながらその下位のレベルにおける形態の差異に着目する相反の関係、④同じく下位レベルにおける機能の差異に着目する

対立の関係などが考えられる。全国に分布する「小京都」や「〇〇富士」などの表現は、その場所のイメージ間の相似の関係に基づき、広域中心地を中心とする地方ブロックの認識などは相同の関係に、東日本対西日本、また都市対農村という認識は、それぞれ相反と対立の関係に基づいている。このようにそれぞれの場所（場所イメージ）は、類似性や相反性などに基づく隠喩的認識によって相対的に関係づけられ、主体の知識の体系の中にそれぞれ位置づけられているのである。

隠喩的認識による、この種の場所の体系的な位置づけの記号化の例として、最近盛んになってきている姉妹都市の縁組みを取り上げることができる。姉妹都市とは、主に親善と文化交流を目的とした、異なる二国（または地域）の都市間での相互提携であるが、このいわゆる「縁組み」には、隠喩的な認識に基づいて行われていると思われる部分がかかなりある。第2表は、わが国のいくつかの都市について、その都市が姉妹都市として提携している海外の都市を示したものである。この表からそれぞれの姉妹都市の間にある関係らしきものをいくつも読みとることができるが、その二つの都市間の関係の多くは類似性を中心とした隠喩的認識に基づいている。

例えば、札幌とミュンヘンを結び付けるものとして、我々はすぐにビールを連想できるし、夕張と撫順では石炭、新潟とガルベストーンは石油、豊田とデトロイトでは自動車、といった具合に姉妹都市の間にある類似性は、おそらく一般的な地理的知識によって容易に推測することができるものである。また、東京の姉妹都市がニューヨーク・北京・パリ・ニューサウスウェルズ州（中心都市はシドニー）であるのに対し、大阪の姉妹都市がシカゴ・上海・ミラノ・メルボルン・レニングラード・サンパウロであり、これが名古屋ではロサンゼルス・南京・シドニー・メキシコとなり、京都ではボストン・西安・パリ・キエフ、などと並べてみると、そこにはいくつかの国の間にまたがる構造的な隠喩の関係を見いだすことができなだろうか。つまり、大阪は「日本のシカゴ」であり、「日本の上海」であり、逆にシカゴは「アメリカの大阪」で、上海は「中国の大阪」であるという隠喩的認識が、これら姉妹都市間の関係には隠されている。

姉妹都市の縁組みが広く市民全体の総意に基づくものであるとする観点からすれば、このように誰にでも納得可能な隠喩的認識に基づく組み合わせが多いことは、当然であるともいえよう。もちろん、姉妹都市の縁組みがすべて隠喩的認識にしたがって行われているわけでははないので、例外も多くあるが、例えば東京がシカゴではなくニューヨークと姉妹都市提携し、大阪が北京ではなく上海と都市提携することに対して、ちょうど人間同士の縁組みのように、いわゆる「釣りがとれる」とか「双方にふさわしい相手」などという意識が働いているとすれば、そこにはすでにかなり記号化した隠喩的認識が存在していたことになる。そもそも「姉妹都市の縁組み」という表現自体が、都市を人間に見立てた隠喩であった。

ところで、「東洋の真珠」や「北陸の小京都」のように、対象の範囲を示す地

第2表 日本の主要都市とその姉妹都市

都市名	提携都市名	都市名	提携都市名	都市名	提携都市名
札幌	ポートルランド ミュンヘン 瀋陽	金沢	バッファロー イルクーツク ポルトアレグレ ゲント ナンシー 蘇州	姫路	シャルルロア フェニックス アデレード クリチーバ 太原
函館	ハリファックス	甲府	デモイン ロダイ ポー 成都	奈良	慶州 トレド(西) 西安
小樽	ナホトカ ダニーデン	岐阜	フィレンツェ 杭州 カンピーナス	岡山	サンノゼ サンホセ(コスタリカ) プロブティブ 洛陽
夕張	撫順	高山	デンバー	広島	ホノルル ボルゴグラード ハノーバー 重慶
盛岡	ビクトリア	静岡	オマハ	下関	サントス イスタンブール 釜山 青島
仙台	リバサイド レンス ミンスク アカブルコ	熱海	サンレモ	大牟田	サウサリート
秋田	蘭州 パッサウ	名古屋	ロサンゼルス メキシコシティ 南京 シドニー	松山	サクラメント
いわき	撫順	豊田	デトロイト	高知	フレスノ 熊湖
水戸	アナハイム	尾鷲	プリンスルパート	北九州	タコマ ノーフォーク(米) 大連
日立	バーミングハム	大津	ランシング インターラーケン ヴェルツブルグ	福岡	オークランド(米) 広州 ボルドー
つくば	ケンブリッジ サマーランド	京都	ボストン ケルン フィレンツェ キエフ 西安 グアダラハラ ザグレブ	長崎	大同 セントポール サントス ポルト ミデルブルフ 福州
千葉	アスンシオン ノース・バンクーバー ヒューストン ケソジシティ	舞鶴	ナホトカ 大連	佐世保	アルバカーキ 廈門
東京	ニューヨーク 北京 パリ ニューサウスウェールズ ソウル	大坂	サンフランシスコ サンパウロ シカゴ 上海 メルボルン レンシングロード ミラノ 香港 パークレー 連雲港	熊本	桂林 サンアントニオ
横浜	サンディエゴ リヨン ボンベイ バンクーバー オデッサ マニラ 上海 コンスタンツア	堺	シアトル マルセーユ リオデジャネイロ 天津 リガ ブリズベーン	大分	アペイロ 武漢
川崎	リエーカ ホルチモア 瀋陽	神戸		別府	木浦 ポーモント 烟台
横須賀	コーバス・クリスティ ブレスト フリーマントル ジリングム			鹿児島	ナポリ パース 長沙
鎌倉	ニース			那覇	ホノルル サンピセンテ 福州
新潟	ガルベストン ハバロフスク 哈爾浜				

名を冠した隠喩的表現は、これらの全てが少なくとも場所であるというイメージの共通部分を持っているので、一定の類似性に基づく上位概念によってグループ化され、その結果、また別のかたちで記号化されやすい。このようにして記号化されたグループか名数でであると考えられる。

名数とは、「三筆」・「四天王」・「七不思議」・「十二使徒」・「三十六歌仙」のように、洋の東西を問わず古くから見られる、複数の要素による概念の定式化・記号化の⁽¹⁵⁾ことである。ここでは、とくに一定の限定された意味空間の中にある要素の内から、一定数の要素を取り出して名数とする場合について考える。

地理的単位に関する名数的なとらえ方は、人名と並んで名数の中でも最も頻繁にみられる部類に属し、「日本三公園」・「三大都市」・「四大工業地帯」・「五大湖」・「東海道五十三次」・「四国八十八カ所」のように定式化した例は多い。しかもこれらはいったん定式化して狭義の記号の働きをするようになると、名数内に入った場所と入らなかった場所との間に大きな場所のイメージの差異を生じさせることになる。

例えば、江戸時代の「三都」は、まず日本という地域の枠が設定されており、その中で主要な都市三つが選ばれたものだが、その選ばれた理由に明確な定義があったわけではない。江戸・京・大坂と金沢・名古屋・新潟などとの間には確かに人口などにおいて差があったものの、当時の地理を詳しく知らない者にとってこの三都市を他の都市と区別しなければならない理由はなく、二都や四都ではなくて三都でなければならない必然性も必ずしもない。しかし、ひとたび「三都」という名数としての理解が成立してしまうと、誰にとっても江戸・京・大坂は他の都市から抜きん出た都市グループとして認識され、その結果、その他の都市との間にある明確なイメージの差を生じさせたことは確かである。

さらに、名数に選ばれたもの同士の間にも、新たな序列を生み出すことがあるのも名数化の働きの一つで、「三都」の場合は、将軍の居城がある政治都市江戸、王城の地である文化の中心地京都、天下の台所である経済都市大坂、といったそれぞれの町の対立する特徴が強調され、都市の機能に対する認識がステレオタイプ化しやすくなった。この場合、ある種の相似・相同の関係によって同類とみなされた「三都」が、その次の認識のレベルにおいて、名数を構成するそれぞれの都市が相反ないしは対立するものとしてとらえられている。

ステレオタイプ化した名数の枠が先にあって、あとからその要素が充填される場合もある。その代表例は、「八景」や「三景」といった名所選の選出であろう。「八景」は、中国北宋時代に画題として成立した「瀟湘八景」に由来するもので、「平沙落雁」は雁の列、「江天暮雪」は雪景色、「瀟湘夜雨」は雨の中というように、画題によって描かれる絵の構図（イメージ）が決まっており、一種の歌枕としての働きを備えている。わが国の「八景」はその模倣で、広重の錦絵などによってよく知られており、八景を選ぶ場所は中国から日本に移されても、八つの画題の構図は変わらず、それぞれのイメージに合った風景（場所）が選ばれ定式化

することになる（「近江八景」・「金沢八景」など）。ただし後世になると、単に八つの風景を選んで並べることに主眼を置くものも出てくる（「琉球八景」・「南都八景」など）が、いずれにせよ、「八つ」の中に選ばれることによって、選ばれなかったそれ以外の場所との間に、場所のイメージの差を作り出し、また選ばれた場所同士の間にもやはり場所のイメージの分化があり固定化しやすくなる、という名数の働きについては変わりがない。

近江八景を例にとると、堅田は浮御堂に「落雁」、唐崎は一つ松に「雨」、瀬田は唐橋の「夕景」、石山は寺に「月」、比良は山に「雪」というようにそれぞれの場所によって絵の構図が定式化しており、「近江八景」に選ばれた八つの地点が特別のものとして意識されたいうえに、瀬田には夕暮れ時の唐橋をイメージし、堅田には浮御堂に雁という風景が期待されるようになった。

4 場所の提喩的認識

残るもう一つの比喩的認識の方法が提喩的認識である。一般に、場所はそれぞれ固有のものであり、外延的意味としては自分自身しか持たない最小の種であるので、個々の場所を類とする提喩は考えられない。したがって場所に関する提喩的認識としては、種としての場所と類としての場所のグループとの間の関係のみが存在することになる。

まず、種としての場所の代わりに類をもって表現したものとして、例えば、中国において「河」は黄河を意味し、わが国で「都」が京都（この地名自体が提喩となっている）を示したことなどが挙げられる。釜石や室蘭や八幡を「製鉄によって成り立っている町＝鉄の町」として捉えたり、鎌倉や金沢を「古都」として表現する場合なども、これに準じて考えられよう。これら提喩的認識の基盤となっているものは、その場所の概念に関わる（類を類たらしめている）特徴の認識であるが、これらの特徴を場所の属性の一部（即ち場所のシンボル）とみなすことも可能である。すると、この種の提喩的認識は、場所のシンボル（その場所の中に付随するモノである場合も、その場所の概念を構成する特性である場合も含む）によって場所を指し示し認識するという点において換喩的認識の場合と区別がなくなり、換喩的認識の一部として解釈することができる。

一方これと逆に、種によって類を示す提喩的認識の例としては、繁華街を一般に「銀座」と呼び、ある種の形の山を一括して「富士」と呼ぶことなどが挙げられよう。この場合も、喩えられる場所の個々について、喩えた場所の特徴との共通性に基づいていると考えれば、その点において隠喩的認識の一部として見ることもできる。

結局、場所に関する提喩的認識に関する限り、提喩と換喩・隠喩との境界は必ずしも明確ではなく、換喩的認識と隠喩的認識の解釈を少し広げれば、提喩的認識を包含させることができるので、場所に関するすべての比喩的認識は、その性質から換喩的認識と隠喩的認識のいずれかに分類することができるのではないか

と考える。

5 比喩的認識と場所イメージの記号化

空間を認識する際に比喩的方法が用いられる最も大きな理由は、数少ない情報によって全体を把握できる点にある。絶対的に情報が不足しているとき、あるいは多くの情報を分析する手間が面倒なときにも、限られた少ないデータによって対象を把握し理解し記憶する方略として、比喩的認識が用いられるのである。その方法には、対象のもつ無数の属性のうちの一つの特徴によって理解する場合と、未知の対象を既知の対象との比較において理解する場合の、主として二つがあって、前者が換喩的な認識方法、後者が隠喩的な認識方法ということになる。むしろその弊害として、対象のイメージは極端に簡略化され、ときに歪んだイメージとなる場合もあるが、その危険を割り引いても、少ない労力の割に得られる効果が大きいため、比喩的な認識を日常のあちこちで見ることができるのだと考えられる。

実際、日常生活の上では、青森県は「本州の北端にあって、リンゴがとれる」ところと理解している程度でふつう十分であるし、名古屋の大須を知らない人に、大須の気候や景観や歴史や風俗などをいちいち教えてやるより、一言「浅草のようなところ、名古屋の浅草」と言ったほうがよほど理解が早い。おそらく、古代や封建社会のもとでの大部分の人のように一つの村の中で一生を過ごし、外の世界について何も知らず、また知る必要もなかった人々にとって、全ての場所とは自分の生活に密着した土地のことであり、そのイメージについても熟知しているがゆえに、場所を認識するにあたって比喩的な方法を用いる必要性も少なかったと思われるが、現代人のように日本国内はおろか世界中に分布する何千何万という膨大な数の場所に囲まれて生活せざるを得なくなると、それらのすべてに対してそれぞれ詳細で正確なイメージを持つことはまず不可能であるし、かりにそれが可能であるとしてもそのために払われる労力を考えると非常に効率が悪い。したがって自分の故郷やとくに関心の深い場所など少数の場所を除くと、これらの場所のほとんどは比喩的に簡略化された形でイメージされているはずで、この簡略化された場所イメージは単純であるがゆえに定型化しやすく、いわゆる地理的常識として、その社会の中の人々に広く浸透しやすいのである。すでに示したように、熊本県に関する本の表紙に阿蘇山の写真が載り、岡山の土産にきび団子を買って、東京とニューヨークが姉妹都市であると聞いても、少しも奇異ではなく、八二多くの人がそのことをむしろ当然のように感じているとすれば、それは人々の中に暗黙のうちに場所に対する共通の理解があるからに相違ない。その共通の理解とは、比喩的な認識方法に基盤をもつ、場所に対するステレオタイプ化された場所イメージの理解である。⁽¹⁶⁾

このようにある場所に対する比喩的な認識が社会全般にわたって広くステレオタイプ化すると、比喩的な認識に基づく比喩的な表現がある決まった場所を意味

することができ、一種の記号（サイン）としての働きをもつようになる。記号となった場所と場所イメージの関係は、ちょうど言語と同じように、広く社会の中でのコミュニケーションの道具として用いられる。

その一方で、比喩的な認識方法は数多くの事項を合理的に記憶するのに有効な方法ではあるが、反面、場所が単純化された場所イメージの形で理解されやすくなることは、場所に対する画一的で硬直したイメージを植え付ける原因ともなる。とくに、レトリックはもともと弁論術として発達したように、詭弁の性質も合わせ持っているため、比喩的な表現は科学的説明以上に説得力を持つ場合があり、その使用は魅惑的で、つい使いたくなるものであるが、単純化された絞切り型の場所イメージほど記号化されやすいから、場所に対する一面的な見方、つまり固定観念を生む危険性を常にはらんでいる。

例えば、一般にインドは熱帯の暑い国だと信じられているが、ジャンム・カシミール地方は北海道に匹敵するくらい寒いし、我々がオーストリアの民族衣装としてイメージするものは、じつはチロル地方だけの衣装であったりする。この種の例で最も体系化され、広く信じられているものは、いわゆる国民性や県民性として取り上げられる、場所（風土）とそこに住む人の性格との関連付けであろう。場所と人の性格との間に何らかの相関が実質的にあるかないかは別として、ドイツ人は科学的で勤勉だが鈍感、イタリア人は芸術的で衝動的で感動的、ユダヤ人は抜け目なくて欲張り、などといった集団へのステレオタイプはわりと広く受け入れられている⁽¹⁷⁾。事実、我々は初対面の相手がドイツ人であると聞いたときと、イタリア人であると聞いたときでは、予想する相手の人物像がかなり違うだろうし、鹿児島人と聞けば西郷隆盛のような重厚な肥大漢を、高知人と聞けば坂本竜馬のようないごっそうをまず思い浮かべるだろう。

このような先入観には、その民族集団とある種の性格集団との類似性を強調する隠喩的な認識、ないしはその集団出身の有名人物をもって、集団全体を理解しようとする換喩的な認識が多分に働いている。たしかにこれら集団へのステレオタイプは一概に否定できないほど説得力があるのも事実であるが、勤勉なイタリア人も遊び好きのドイツ人もいれば、鹿児島や高知の人にも気の弱い人がいることもまた疑いがなくて、これらの事実認識がしっかり理解できていないと、いわゆる「偏見」の原因となってしまう危険である。言うまでもなく、ユダヤ人に対する迫害や白人の有色人に対する軽蔑なども、場所とそこに住む人に対するイメージのステレオタイプ化が原因の一つであり、これらの偏見は記号化した場所イメージと密接に結びついている。

これと関連して、俗に「地理は暗記もの」などと言われているように、今日のわが国の地理教育にはこうした換喩的な認識によって場所を理解することを奨励しているようにも見える部分もあるので、こうした絞切り型（ステレオタイプ）の場所イメージが、学校教育を通じて既に小中学生の段階から一般化し共通化しているのではないかという危惧もある。ある国をイメージした際に、その国の代表

的な農産物と産業都市の名前以外は、その国の風景も人々の生活の様子もまったく思い浮かばないといった状況も、杞憂とばかりは言えない。本来個人的であるはずの場所と場所イメージの結びつきが、テストを通じて均一な社会の中で共通化され記号化され、いわゆる地理のテスト用の共通言語としての場所イメージも、また確かに存在する可能性がある。

注

- (1) 内田順文「地名・場所・場所イメージ——場所イメージの記号化に関する試論——」人文地理39—5, 1987, 1—15頁。
- (2) このような観点から比喩を扱ったものとして、佐藤信夫『レトリック感覚』講談社, 1978, 264頁。佐藤信夫『レトリック認識』, 講談社, 1981, 250頁。佐藤信夫『レトリック・記号e t c.』創知社, 1986, 269頁。瀬戸賢一『レトリックの宇宙』海鳴社, 1986, 96頁。ブラック, サール他, 佐々木健一訳『創造のレトリック』勁草書房, 1986, 290頁。レイコフ, ジョンソン, 渡部・楠瀬・下谷訳『レトリックと人生』大修館書店, 1986, 335頁。山梨正明『比喩と理解』東京大学出版会, 1988, 204頁。瀬戸賢一『レトリックの知』新曜社, 1988, 314頁。などがあり、本稿における比喩の扱いもこれらを参考とした。
- (3) Tuan, Y., 'Sign and Metaphor', *Annals of the Association of American Geographers* 68-3, 1978, pp.363.-372.
- (4) Livingstone, D. N., Harriton, R. T., 'Meaning through metaphor: analogy as epistemology', *Annals of the Association of American Geographers* 71-1, 1981, pp.95-107.
- (5) Mills, W. J., 'Metaphorical Vision: Changes in Western Attitudes to the Environment', *Annals of the Association of American Geographers* 72-2, 1982, pp.237-253.
- (6) Downs, R. M., 'Maps and metaphors', *The Professional Geographer* 33-3, 1981, pp.287-297. Graham, E., 'Maps, metaphors and muddles', *The Professional Geographer* 34-3, 1982, pp.251-260. Kuipers, B., 'The Maps in the head metaphor', *Environment and Behavior* 14-2, 1982, pp.202-220.
- (7) 一般に西洋古典レトリックでは、直喩・隠喩・換喩・提喩をまとめて「転義 (trope)」と呼び、日本語のいわゆる「比喩」はこれとほぼ同義であると考えられる。前掲(2)佐藤 (1978) 172—175頁。
- (8) 従来のレトリックでは、この全体と部分の認識に基づく比喩を提喩とみなすものが多い。
- (9) 内田順文「都市の「風格」について」地理学評論59—5, 276—290頁。
- (10) 本来、原爆ドームそのものが広島を換喩となっているのではなく、(世界初の) 原子爆弾投下という事件が広島を表現しているのだが、歴史上の事件は直接見ることができないので、記号表現 (シンボル) としての原爆ドームによって事件を表現している。「関ヶ原古戦場」や「芭蕉句碑」のような記念碑や文学碑や銅像なども同様の例と考えられる。
- (11) ただし、土産品や写真の映像とその場所との結びつきは、これらを贈られる人や観る人によって知られている必要があるので、ときに金沢の長生殿がただの落雁と思われたり、ポンペイの遺跡を知らない人にはただの廃虚の前で写したとしか見えないような写真があったりする。この点からすれば「倉敷」とか「Roma」とかの文字が入った土産品や、「摩周湖」とか「Yosemite National Park」といった看板の前で撮っ

た記念写真は、狭義の記号である言語（地名）を利用してその場所を表現しているの
で、最も確実に記号としての役割を果たしており、そのような手段が実際に多く用い
られていることの説明になろう。

- (12) 長谷章久「文芸風土学の意義と方法」(日本文学風土学会編『風土と文学』教育出
版センター, 1984), 9—76頁。
- (13) これは全体（容器）によって部分（内容）を喩えた換喩表現である。
- (14) さらに詳しくみれば、Aにあたる場所がCにあたる場所の中に包含される場合
（例えば、「東洋のナポリ」や「土佐の軽井沢」と、AとCにあたる場所が対等なもの
（相反や対立の関係にある場所）としてとらえられている場合（例えば、後述する姉
妹都市の関係など）とに分類することができる。前者の場合、喩えられる場所（C）
が喩える場所（A）より優位にあたるという比喩的認識を反映するものであると考え
られ、このような認識の有無は、鹿児島を「東洋のナポリ」と言うことはあっても、
ナポリを「西洋の鹿児島」と言うことはほとんどないことに求めることができよう。
- (15) 本来、名数とは「3メートル」「100匹」「千円」のように、ある数に単位の名称や、
ものの数え型を表す接尾辞をつけた語をさしているが、「うそ八百」「十六夜」「四天王」
のように、いつもある数をつけて言う特定の内容を持った語をさすこともある。
- (16) 比喩的な認識に基づく呼び名がステレオタイプ化した究極の姿は、その比喩が社
会的に広く認められて、最終的には地名となる場合であろう。実際、こうした認識過
程を経て表現が定着し、地名となることはそう珍しいことではなく、むしろ自然発
生的な地名のほとんどは、場所につけられたあだ名がステレオタイプ化した結果、記
号化された例であると考えることすらできる。そのなかでも最も多いのは、換喩的認
識に基づく地名であろう。松の林があったので「松原」、神社があるので、「一宮」な
どがその例である。大きい島だから「大島」や大きい港だから「大津」というのは提
喩的認識に近いが、「大きい」ということも場所の属性の一部とみなせば換喩の一
種となる。隠喩的認識に基づく地名もある。「鳥帽子岳」や「鋸山」や「白馬岳」の
名で呼ばれる山は、その山体が鳥帽子や鋸や代（しろ）馬に似ていたところから名
付けられたものであるし、「琵琶湖」はその形が琵琶に似ているところから名付け
られた。また、「榛名富士」や「日本アルプス」や「日本ライン」は、「富士山」・「アル
プス」・「ライン川」との類似性に基づいた隠喩としての「榛名の富士山」・「日本
のアルプス」・「日本のライン川」という表現が、そのまま固有の地名となって定
着したものである（日本アルプスはW. ウェストンの、日本ラインは志賀重昂の命
名によるものであり、一個人の比喩的認識が一般的な地名になることを示す典型
的な例である）。これらの地名に共通することは、その場所がはじめにどのような
場所として認識されたかが、そのまま地名に反映されていることである。それは
それぞれの場所イメージを構成する無数のイメージのなかで、どのイメージが
その場所を特徴づけるものとして認識されたかによる。したがって地名は、その
名称のもととなった場所の認識方法を示している。しかし、それが換喩的認識
から起こったにせよ、隠喩的認識から起こったにせよ、必ずその認識方法が
取られることが決められていたわけではない。その点において地名と場所イ
メージの結びつきは、やはり恣意的である。
- (17) ハーデング他（田村栄一郎訳）『偏見と人間関係』みすず書房, 1958, 8頁。
(本学専任講師・地理学)